



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

National Institutes for the Humanities

要覧 2010



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

National Institutes for the Humanities

要覧2010

目次

機構長あいさつ	1
設立の経緯と目的 / 沿革 / 歴代機構長	2
組織図	3
人間文化にかかわる総合的研究推進	4
I 事業概要	4
II 総合研究推進委員会	4
III 連携研究	5
IV 連携展示	6
V 研究資源の共有化	7
VI 日本関連在外資料の調査研究	8
VII 国際連携協力	9
VIII 地域研究の推進	10
IX 講演会・シンポジウム	12
知的財産	13
研究活動アーカイブ	14
各機関の活動	16
・ 国立歴史民俗博物館	16
・ 国文学研究資料館	20
・ 国立国語研究所	24
・ 国際日本文化研究センター	28
・ 総合地球環境学研究所	32
・ 国立民族学博物館	36
資料	40
委員会一覧	40
経営協議会/教育研究評議会/総合研究推進委員会/ 評価委員会/機構会議/企画・連携・広報室会議/ 研究資源共有化事業委員会/地域研究推進委員会/ 日本関連在外資料調査研究委員会	
データ一覧	42
役職員数/予算/施設一覧/共同研究の件数および共同研究員数/ 研究者の受け入れ・派遣/外部資金の受け入れ/データベース一覧/ 大学院教育/特別共同利用研究員	

表紙

「黒綸子地草花滝模様紋縫箔小袖」

国立歴史民俗博物館

ごあいさつ



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構は、平成16年(2004)に設立された人文学系の研究組織です。国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所および国立民族学博物館の6つの研究機関によって構成されています。本機構は、これらの諸機関がそれぞれの設立目的を果たすとともに、学問的伝統の枠を越えて連合し、自然環境をも視野に入れた人間文化の研究組織として、人文系ないし人間サイドに視点を据えた総合的研究拠点を形成しています。法人設立以来第1期には、年間150件程度の共同研究を実施し、国内外の国公立大学などから3000人以上もの研究者が共同研究員として参加しています。文系

研究者の中心となってまさしく大学共同利用・共同研究を推進しています。

本機構は国立大学法人とともに第2期目の中期目標・中期計画期間を迎えます。さまざまな地球的課題に対応しつつ、よりよい知的社会の構築に向けて、本要覧にあるように各研究機関が努力を続けています。第1期には、機構を構成する6つの研究機関を中核とし、国内外の大学・研究機関の研究者の参画を得て「連携研究」を実施してきましたが、第2期ではこれを一層充実します。また、これら6機関が所蔵する膨大な研究資料と蓄積した研究成果をデジタル化して、これをネット上の共通のプラットフォームで利用できるようにし、あわせて広く情報提供するための「研究資源共有化」事業を進めてきました。第2期ではこれを拡充するとともに機構外とのリンクをめざしています。

さらにわが国の地域研究の拠点形成を進めるため、地域研究推進センターを設置し、イスラーム地域研究、現代中国地域研究の10余の研究プロジェクトを推進してきましたが、さらに現代インド地域研究拠点形成支援事業を始めます。そのため、本機構は研究者を採用し、各大学などへ派遣しています。

これらのほか、海外諸地域におけるプレゼンスの相対的な地位低下傾向のみられる日本研究を支援し、日本関連在外資料をめぐる国際共同研究も開始します。

平成22年5月

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
機構長 金田 章裕

設立の経緯と目的

大学共同利用機関は、学術研究の拠点として、大規模な施設設備や膨大な資料・情報などを我が国および諸外国の大学などの多数の研究者の利用に供するとともに、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構は、人間文化にかかわる5つの大学共同利用機関(国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館)によって構成され、平成16年4月に設立されました。また、平成21年10月には6番目の大学共同利用機関として新たに国立国語研究所が設置されました。

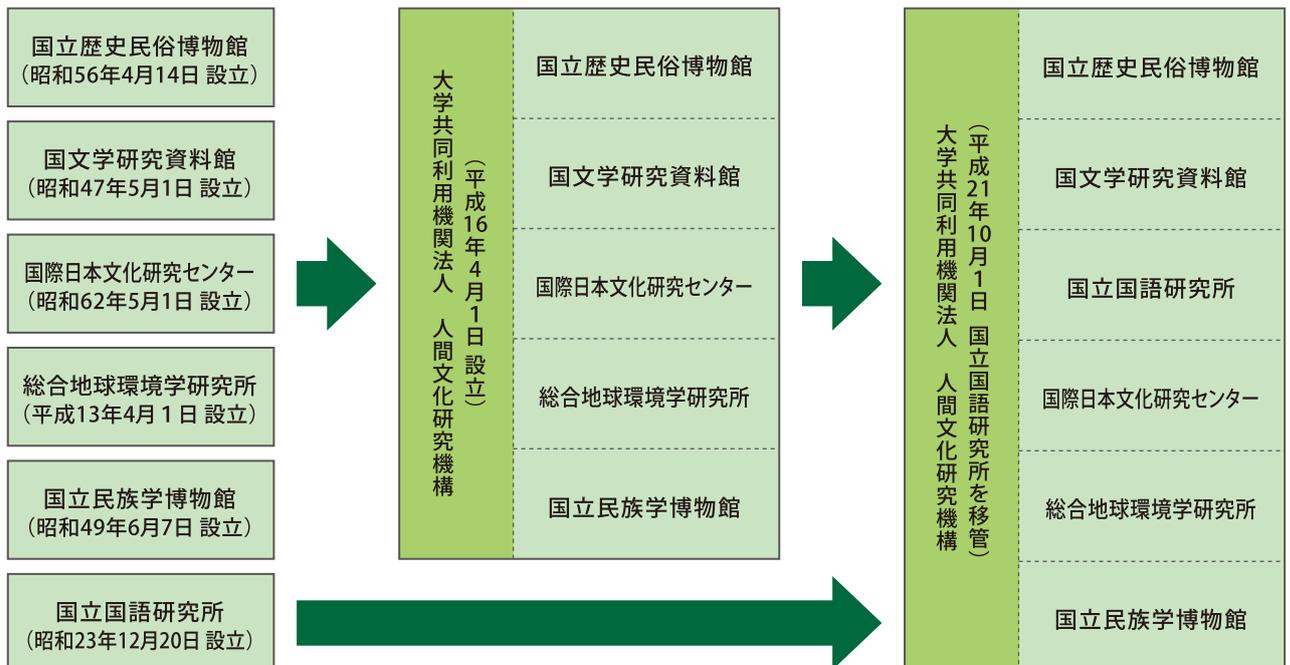
21世紀を迎えた今日、自然と人間の歴史的営為が地球規模で複雑に絡み合った難問が山積しています。本機構は、それらに対応するために、自然環境をも視野に入れた人間文化に関する総合的研究をめざして、6つの研究機関が旧来の学問の枠を超えて連合し、新しいパラダイムを創出する研究拠点

を形成するとともに、膨大な文化資料に基づく実証的研究、人文・社会科学の総合化をめざす理論的研究など、時間、空間の広がりを視野に入れた文化にかかわる基礎的研究および自然科学との連携も含めた研究領域の開拓に努め、文化の総合的学術研究の世界的拠点となることを目標とするものです。

機構を構成する各研究機関とその研究者は、それぞれの個性を保ちつつも、その専門分野を超えた研究プロジェクトに積極的に参加することによって、機構の創造的発展を図ります。

本機構には、博物館、資料館の文化資料のナショナルセンターとしての機能をもつ研究機関が参画しています。機構を構成する各研究機関がすでに蓄積し、これからも収集に努める「資料」と「情報」に基づき、機構内外の研究者の総力を結集して調査研究を実施し、機構全体としてその研究成果を展示、刊行物さらにはあらゆる情報機能などを活用することにより広く国内外に発信し、学術文化の進展に寄与することをめざすものです。

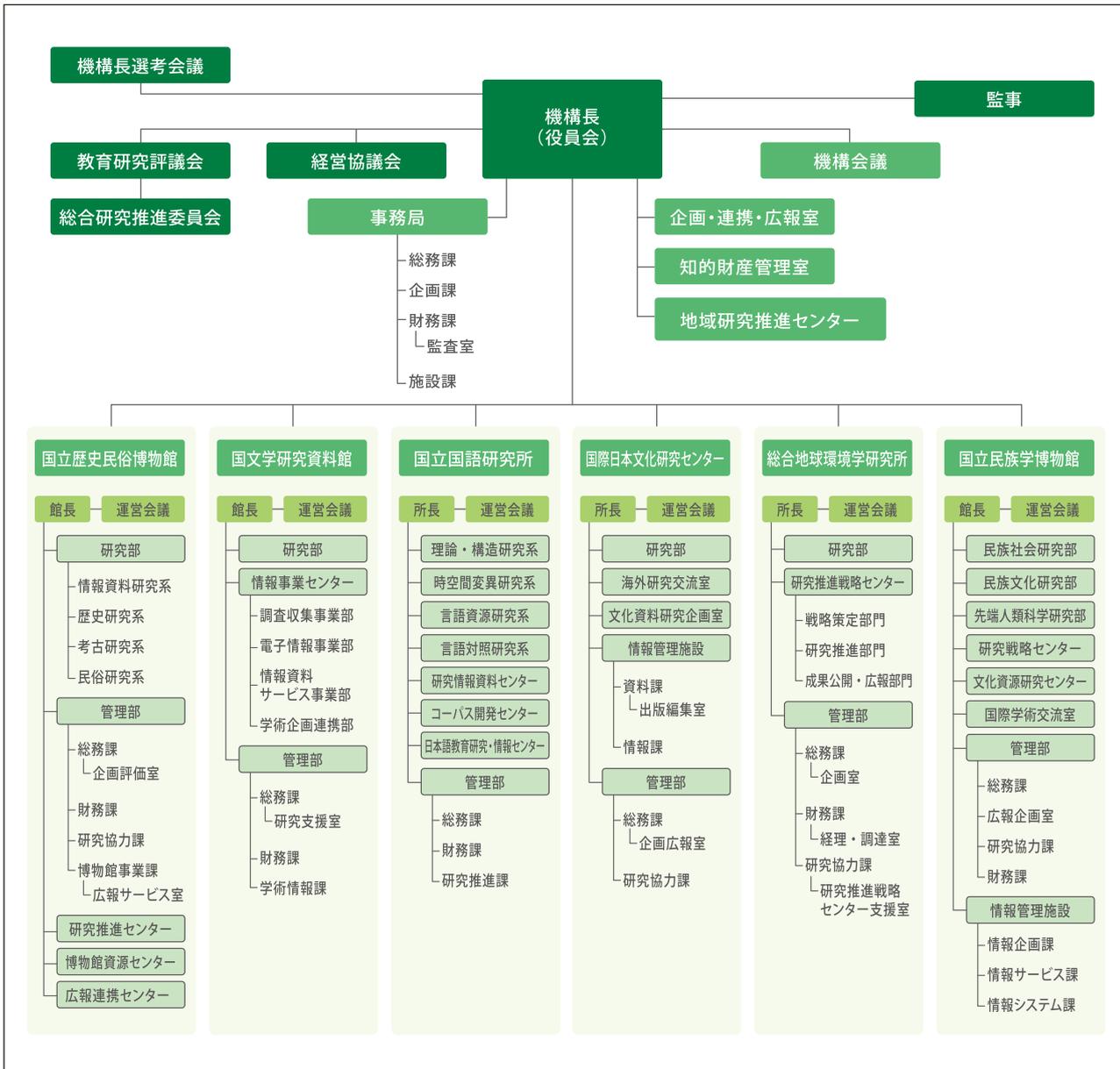
◆ 沿革



◆ 歴代機構長

- 初代 石井 米雄 【平成16年(2004)4月1日～平成20年(2008)3月31日】
2代 金田 章裕 【平成20年(2008)4月1日～現在】

組織図



❖ 機構役員

金田 章裕	機構長
中尾 正義	理事
小野 正敏	理事
栗城 繁夫	理事(兼)事務局長
石上 英一	理事(非常勤)
広渡 清吾	監事(非常勤)
駒形 圭信	監事(非常勤)

❖ 各機関の長

平川 南	国立歴史民俗博物館長
今西 祐一郎	国文学研究資料館長
影山 太郎	国立国語研究所長
猪木 武徳	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長

❖ 機構本部

小野 正敏	企画・連携・広報室長
中尾 正義	知的財産管理室長
中尾 正義	地域研究推進センター長

人間文化にかかわる総合的研究推進

I 事業概要

21世紀における人類にとってもっとも重要で緊急の課題は、地球における人類の生存のための環境問題とともに、世界における人間の共生です。この難問を解く鍵は「文化」にあるとの発想に基づき、人間文化研究機構は人間文化研究の新たな領域を、従来の枠組みを超えて創出し、先端的・国際的な研究を展開するため、平成22年度に教育研究評議会のもと新たに総合研究推進委員会を設置し、必要な推進体制を整備しつつ、次のような活動を推進しています。

- 連携研究
- 連携展示
- 研究資源の共有化
- 日本関連在外資料の調査研究
- 国際連携協力
- 地域研究の推進
- 講演会・シンポジウム



国際シンポジウム「ユーラシアと日本—交流と表象の総括と課題—」

II 総合研究推進委員会

平成22年度から人間文化研究総合推進検討委員会を改組し、総合研究推進委員会としてさらなる事業の推進をめざしています。

総合研究推進委員会では、本機構を構成する大学共同利用機関それぞれのミッションに応じて、第1期中期目標・中期計画における研究・教育活動を、研究者コミュニティの要望などをふまえつつ、社会的な発信活動なども含めてレビューし、各機関の第2期における活動の方向性を検討しています。

各機関独自の活動に加えて本機構では、人間文化研究機構としての一体的取り組みも行ってきました。専門領域の異なる各機関がお互いに連携して実施する連携研究や連携展示などです。また、我が国にとって重要であるにもかかわらず拠点形成が遅れている地域を対象とする地域研究の推進事業もあります。第1期にはイスラーム地域や現代中国を対象としてその活動を行ってきました。さらに、本機構内の各機関の開発した人間文化研究にかかわるデータベースを統合的に検索するシステムを開発して公開し、研究者および一般の利用に供しています。

第2期となった平成22年度からは、上記活動に加えて、各機関や大学附置の研究機関および諸外国の研究機関と連携する日本関連在外資料研究を始めるとともに、地域研究としては新たに現代インド地域を追加して開始したところです。

本委員会では、各機関それぞれの取り組みをふまえつつ、これら機構としての一体的活動についてもレビューするとともに、機構および各機関の組織・運営のあり方についても検討して、人間文化研究に関する新たな学問領域の創出をめざします。

Ⅲ 連携研究

機構を構成する6つの大学共同利用機関はそれぞれの分野における研究のセンター的な役割を担っており、個別の大学ではあつかえない研究資料群や研究情報を重点的に収集・整理・調査・研究し、全国の研究者の利用に供してきました。また、各機関は個別に大学共同利用機関として国内外の多くの研究者との共同研究を行ってきました。

この各機関が培ってきた研究基盤と成果を有機的に結合させて、それらをさらに高次なものに発展させる目的で、機構発足時から機関や機構を超えて組織された「連携研究」が企画、実施されてきました。

第1期中期目標・中期計画期間では、「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究」および「文化資源の高度活用」について、人間文化研究の新たな領域の策定に向けて、従来の枠組みを超えた先端的・国際的な研究を、機構内外の大学・研究機関との連携・協力のもとに展開しました。

第2期中期目標・中期計画期間では、企画・連携・広報室において中心となる連携研究課題として次の2つのテーマを設定しました。

平成22年度連携研究 「人間文化資源」の総合的研究

本研究は、資源を人間とのかかわりにおいてとらえ、人類の歴史を多様な資源の開発と利用という観点から探究し、さまざまな時代や地域における実践や制度、観念や価値を資源活用との関連で再検討することを主題としています。

ここで取り上げる「人間文化資源」とは、人間文化を対象とする諸科学の研究資料をさし、図書館・文書館の典籍(図書、書物)・文書資料や博物館の標本資料・映像音響資料はもとより、考古遺跡や歴史的建造物、祭礼・儀礼や伝統芸能なども含まれます。

アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明

本研究は、アジアにおける人間文化と自然との重層的なかかわりとその歴史を総合的に解明することを大きな目的とします。研究では、①山川草木に代表される自然思想の系譜と現代的な意義、②自然の開発と保全にかかわる制度・慣行の歴史、③共有資源をめぐる社会経済史的研究の3点に主眼しました。機構のもつ人材と資源を最大限活用し、先史考古学、歴史学、思想史、民族(民俗)学、言語学、地球環境学などの分野の連携を通じて、日本を含むアジアの自然と文化に関する研究の新機軸をめざしたいと考えています。

◆ 連携研究の概念図



人間文化にかかわる総合的研究推進

IV 連携展示

人間文化研究機構は、膨大な研究資料・情報を収集、調査研究し、そして提供することを共同利用の形態・機能のひとつに掲げています。国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館は大規模な展示施設を有し、常設展示・企画展示を行っており、さらに、国文学研究資料館も、平成20年3月に立川の新庁舎に移転し、展示室の公開を開始しました。

大学共同利用機関としては、共同研究をはじめとする種々の研究成果について、刊行物・データベース・講演会・シンポジウムなどに加えて、展示によって迅速に公開し、社会連携の推進のために広く国民に供覧し、理解を進める特色のある機能をもちます。機構の連携事業として、各機関の共同研究や複数機関による連携研究の成果などを展示公開することは、本機構が有する重要な機能であり、展示形態のひとつとして、複数機関が連携して研究成果を公開する「連携展示」を推進しています。

平成22年度 連携展示

自分たちで作る『国連子ども環境ポスター展』

Part 3 子どもたちが感じた「生物多様性」

平成22年10月中旬 愛・地球博記念公園 愛知県

平成22年11月 奈良県河合町立文化会館

平成22年12月中旬 石川県立音楽堂

総合地球環境学研究所

国立歴史民俗博物館

国立民族学博物館

総合地球環境学研究所では、連携共同推進事業として過去に2カ年にわたり小学校高学年を対象に、国連子ども環境ポスター展応募作品を活用した活動を行ってきました。世界中の子どもたちが描いた環境ポスターについて、日本の子どもたちが気に入ったポスターを選択し、そのポスターの中にどのような生物多様性が描かれているか、作者のメッセージを読み取り、そのうえで自分のメッセージを書き込みます。このようにして作成された作品を一般公開していきます。

チベット ポン教の神がみ

平成22年7月2日～9月10日

主催 国文学研究資料館

国立民族学博物館

国立民族学博物館は平成7年以来、ボン教について調査研究を積み重ねてきました。その成果の一部として収集したボン教図像資料から、主としてボン教の神々の構造をタンカを通じて示すとともに、ボン教の歴史や現代における分布、現実に行われる儀礼などを紹介します。チベットの基層文化としてのボン教を広く一般公衆に知ってもらうことにより、日本人のアジア理解を深めることを目的として展示します。

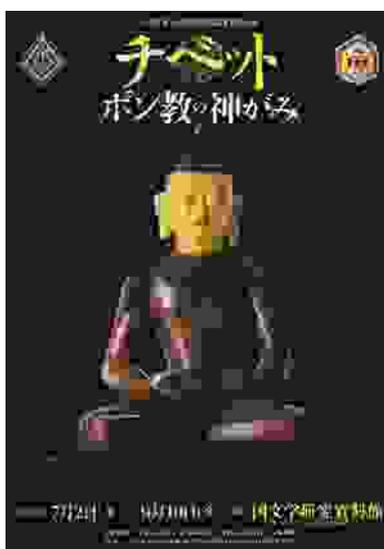
アジアの境界を越えて

平成22年7月13日～9月12日

主催 国立歴史民俗博物館

国立民族学博物館

境界とは、二つの世界が接し重なるところです。視点や立場によって姿かたちを変え、歴史の中に実にさまざまな境界の姿がみえてきます。連携研究「ユーラシアと日本：交流と表象」では、境界をキーワードのひとつとして人文学の諸分野が議論を重ねてきました。その成果を、展示という形で情報発信します。古代と近現代における境界を眺めることによって、現代のわれわれがもつ「境界」というイメージを相対化する場を提供します。



連携展示ポスター
「チベット ポン教の神がみ」

V 研究資源の共有化

人間文化研究総合推進事業の一環として、平成17年度より、5機関(国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館)の開発した人間文化研究にかかわるデータベースを統合的に検索する研究資源共有化システムの開発を始めました。この事業は、法人第2期「人間文化研究の連携共同推進事業」の一環として引き続き展開します。

平成19年度に、5機関の100を越えるデータベースを横断検索する「統合検索システム」と、小規模なデータベースを容易に公開できる研究者参加型の「nihuONEシステム」を開発しました。統合検索システムは、平成20年4月より、nihuONEシステムは平成20年12月から国内外に公開しています。国立国語学研究所のデータベースも平成22年度に統合検索システムに参加します。

また、人間文化研究に不可欠な時間(年代・時代など)と空間(地理的位置・地名など)を用いた時空間分析・検索システム「GT-Map/GT-Timeシステム」の研究開発を進めています。

研究資源共有化事業委員会

平成20年度に、「人間文化研究機構研究資源共有化事業委員会」を設置し、統合検索システムや時空間分析・検索システムの開発、統合検索システムやnihuONEの運用の事業を行っています。

学界連携の推進

委員会では、人間文化研究にかかわる学界の諸機関、研究者と連携した資源共有化環境の構築を推進しています。平成20年度に「人間文化にかかわる情報資源共有化研究会」を開催し、さらに平成21年度から学界に広く呼びかけて、公開の「人間文化研究情報資源共有化研究会」を発足させました。平成21年度開催の3回の研究会の報告は、『人間文化研究情報資源共有化研究会報告集1』(平成22年3月)に掲載しました。

また、人間文化研究情報資源の学界連携推進事業として、平成22年4月に国立国会図書館関西館と連携覚書を締結し、国立国会図書館デジタルアーカイブポータルPORTAと統合検索システムの双方向の検索を開始することとしました。

【 資源共有化システムで利用できるデータベース 】

国立歴史民俗博物館▶ 館蔵資料 / 館蔵中世古文書 / 館蔵近世・近代古文書 / 館蔵紀州徳川家伝来楽器 / 館蔵武器器具(実物資料) / 館蔵武器器具(文献史料) / 館蔵錦絵 / 館蔵「懐溜諸屑」 / 館蔵野村正治郎衣裳コレクション / 館蔵染色用型紙 / 館蔵縄文時代遺物 / 館蔵装身具 / 館蔵高松宮家伝来禁裏本 / 兼願卿記 / 歴博図書目録 / 日本荘園 / 荘園関係文献目録 / 自由民権運動研究文献目録 / 棟札 / 古代・中世都市生活史 / 江戸商人・職人 / 中世制札(制札) / 中世制札(文献) / 中世地方都市(都市) / 中世地方都市(文献) / 陶磁器出土遺跡(遺跡) / 陶磁器出土遺跡(文献) / 土偶 / 近世窯業遺跡 / 近世窯業関係主要文献目録 / 城館城下発掘(遺跡) / 城館城下発掘(文献) / 弥生石器遺跡(遺跡) / 弥生石器遺跡(図面) / 東国板碑(遺跡等) / 東国板碑(板碑) / 東国板碑(文献) / 民俗誌 / 日本民俗学文献目録 / 宮座研究論文

国文学研究資料館▶ 収蔵アーカイブズ情報 / 吾妻鏡 / 絵入り源氏物語 / 二十一代集 / 日本古典文学本文 / 図書・雑誌所蔵目録 / 近代文献情報(近代書誌・近代画像) / コーニツキー版 欧州所在日本古書総合目録 / 古筆切所収情報 / 「史料所在情報・検索」システム / 館蔵和古書画像 / 「古事類苑」 / 新奈良絵本画像 / 歴史人物画像 / 国文学論文目録 / 近代文献情報(明治期出版広告) / 史料情報共有化 / 和刻本漢籍総合 / 館蔵神社明細帳 / 連歌・演能・雅楽 / 古典学統合百科(伝記解題) / 古典学統合百科(地下家伝・芳賀人名辞典) / 日本古典籍総合目録 / アーカイブズ学文献

国際日本文化研究センター▶ 貴重書 / 西洋医学史古典文献(野間文庫) / 宗田文庫図版資料 / 日本研究機関 / 絵巻物 / 怪異・妖怪絵姿 / 近世風俗図会 / ちりめん本 / 米国議会図書館所蔵奈良絵本 / 平安京都名所図会 / 平安人物志短冊帖 / 平安人物志 / 米国議会図書館所蔵浮世絵 / 都年中行事画帖 / Japan Review / 日文研フォーラム報告書 / 日本研究 / 於竹大日如来縁起絵巻 / 怪異・妖怪伝承 / 季語検索 / 近世崎人伝(正・続) / 考古学GIS / 図録 米欧回覧実記 / 錦絵観音霊験記の世界 / 俳諧 / 連歌 / 和歌 / 在外日本美術 / 日本関係欧文図書目録 / 所蔵地図

総合地球環境学研究所▶ 世界地図 / 所蔵図書 / 西表文献 / 映像資料

国立民族学博物館▶ 標本資料目録 / 標本資料詳細情報 / 標本資料記事索引 / 映像資料目録 / ビデオテープ / 音楽・芸能の映像 / カウフマン・アフリカ古地図コレクション / 音響資料目録 / 音響資料曲目 / 図書目録 / 雑誌目録 / 中西コレクション / 衣服・アクセサリ / 身装文献

【 nihu ONE システムで公開されているデータベース 】

縄文集落 / 縄文集落文献 / アーカイブズ学文献 / 生態史写真資料 / 生態史文献資料 / 梅棹忠夫著作目録 / 和漢オントロジ / 東洋文庫・中華教育界目録 / 幕末明治地図 / 幕末明治地図-郡名

人間文化にかかわる総合的研究推進

VI 日本関連在外資料の調査研究

欧米・アジア諸国に所在する日本関連在外資料に関しては、専門研究者の不在や個人所蔵であるなどの理由により、資料所在情報が把握されていないもの、詳細調査による資料価値の掌握されていないものが多数存在します。これらについて、文化人類学、民俗学、歴史学、国文学、国語学、美術史学、アジア学などの人間文化研究の諸分野の専門的研究者の派遣・招請による国際共同研究に基づく調査・研究を緊急に実施し、放置・劣化・散逸を防ぎ、調査成果・実物の情報提供、資料の保存・活用を行うことは、国際的な日本文化研究の発展のための喫緊の課題となっています。

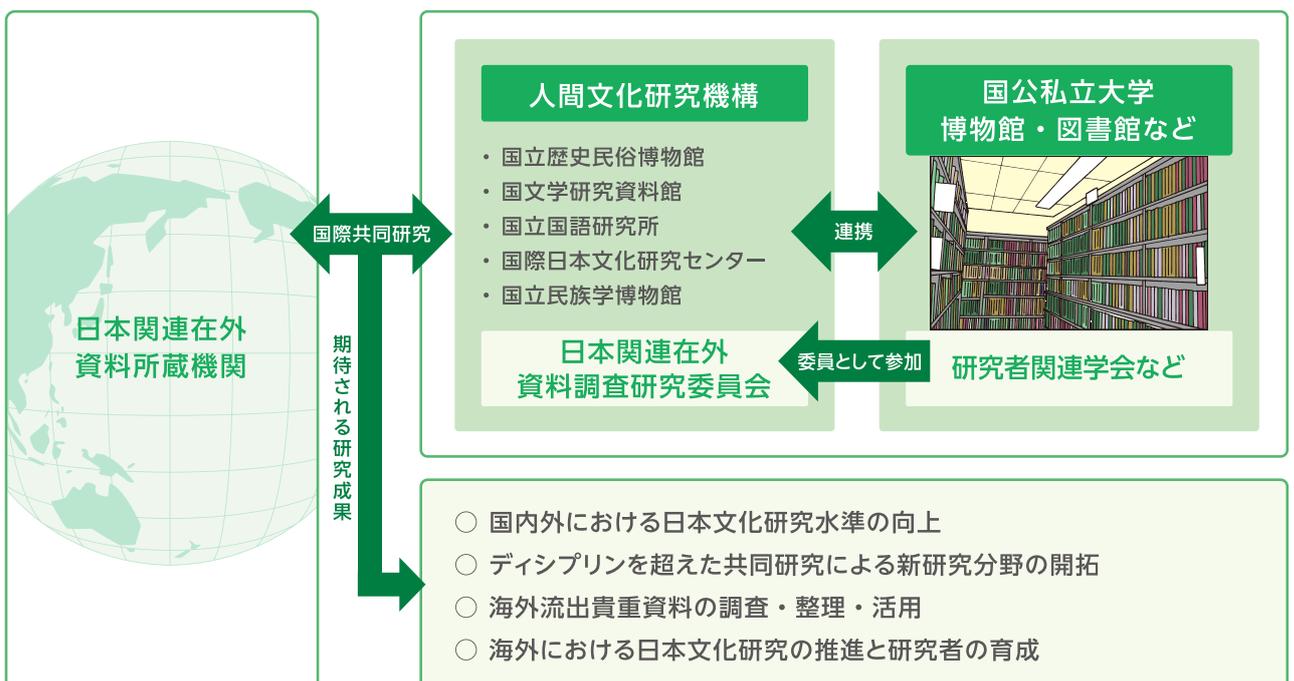
人間文化研究機構の研究機関では、これまでも国文学研究資料館や国立歴史民俗博物館におけるオランダのシーボルト関係史資料の調査研究、国際日本文化研究センターの韓国・中国における日本関連在外資料調査、国立民族学博物館による在外博物学・民族学標本コレクション調査など、個別に在外史資料の蒐集、調査、研究に取り組んできました。

平成22年度から、新たに人間文化研究機構の事業として、日本関連在外資料の国際共同研究を開始し、欧米などにおける日本文化研究の比重低下の状況の打開と日本文化の世界史的意義を明らかにすることをめざします。ここでは、これまでの機関や研究者による研究テーマ別の調査研究から進めて、機構として一体的な研究体制を構築し、多様な資料の総合的調査研究、機構外の研究機関や海外機関との協力・協業のもとで国際研究ネットワーク構築を進めます。

この事業を推進するため、全体的な企画・調整を行う「日本関連在外資料調査研究委員会」を新たに設置し、同委員会において調査対象の地域や機関・資料群、共同研究の中心となる研究機関、研究計画などを検討し推進します。

平成22年度の活動については、日本関連在外資料を、近世以降に日本から持ち出された「流出」資料群と日本人の活動などにもない諸事情で海外に残された近代以降の「滞留」資料群というふたつの視点で整理し、シーボルト関連資料と移民関連資料を中心に調査研究を開始します。

◆ 日本関連在外資料の国際共同研究の推進（概念図）



VII 国際連携協力

人間文化研究機構では、外国の研究機関との研究協力関係の構築を図り、外国人研究者招へい、研究者の海外派遣を進めるとともにイギリスやオランダにおける国際研究集会・シンポジウムの開催やそれへの研究者の参加を積極的に支援しています。

機構を構成する6つの研究機関は、それぞれのミッションに従い、従前から独自の国際連携協力ネットワークを構築してきており、平成21年度には国立釜山大学校博物館（大韓民国）との共催による国際研究集会、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所（フランス）との研究発表会、国立サン・マルコス大学（ペルー）との遺跡の共同発掘調査など、機構として研究協定を締結している外国機関との国際連携協力事業を実施しました。また、英国芸術・人文リサーチ・カウンシルとの協定に基づき、英国の大学院生の受け入れのためのレビュー事業を平成21年度から開始し、平成21年度には国文学研究資料館および国際日本文化研究センターにおいて合計4名の大学院生を受け入れました。

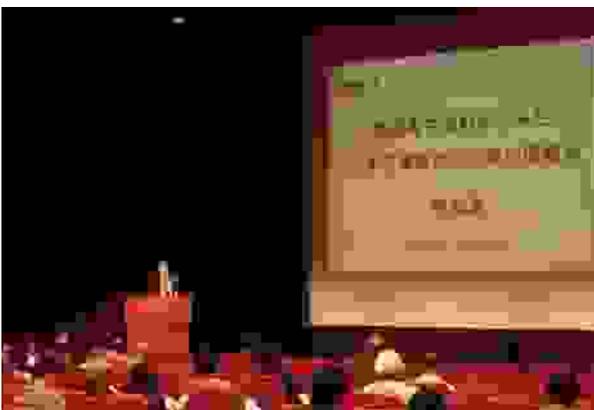
今後も各機関の国際連携活動を推進するとともに、上記以外の国や研究機関も視野に入れた国際連携協力の方策を検討していきます。



コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所（フランス）との研究発表会



英国芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）による英国大学院生 研究発表風景



国立釜山大学校博物館（大韓民国）との共催による国際研究集会



AHRCとの協力協定書

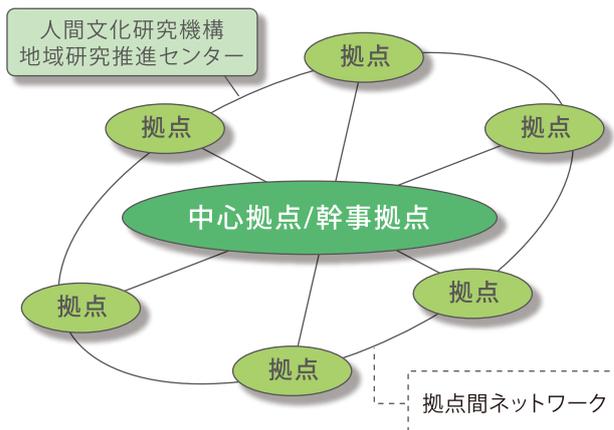
人間文化にかかわる総合的研究推進

VIII 地域研究の推進

人間文化研究機構は、わが国にとって学術的、社会的に重要な意義を有する地域の文化、社会を、総合的に理解、解明するため、関係大学・機関と協力して、平成18年度から、「地域研究推進事業」を開始しました。

事業の実施方式

本事業は、関係大学・機関と研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築して、特定重要地域の研究を総合的に推進する新しい方式の研究事業です。



学識経験者で構成する人間文化研究機構の「地域研究推進委員会」において、対象地域として「イスラム地域」、「現代中国」および「現代インド」を選定しました。それぞれ事業基本計画と研究計画を策定して研究体制を整備し、「イスラム地域」は平成18年度から、「現代中国」は平成19年度から、「現代インド」は平成22年度から研究を進めています。

人間文化研究機構のもとに設置された「地域研究推進センター（センター長 中尾正義）」で、本事業の推進に必要な研究者を「地域研究推進センター 研究員（機構研究員）」として採用し、各拠点へ派遣しています。研究員は、拠点の形成と運営のための実務および共同研究の推進を担っています。

イスラム地域研究

早稲田大学イスラム地域研究機構イスラム地域研究所

「現代イスラム地域研究センター」

※ イスラム地域研究中心拠点

・研究テーマ「イスラムの知と文明」

・研究所長…佐藤次高 ・機構研究員…湯川武・佐藤健太郎

東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発

センター「イスラム地域研究部門」

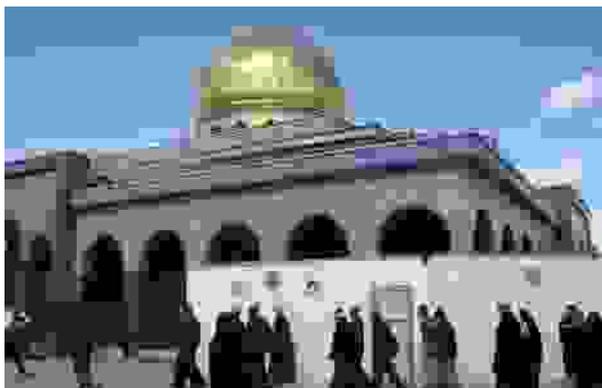
・研究テーマ「イスラムの思想と政治：比較と連関」

・部門の長…小松久男 ・機構研究員…濱本真実

上智大学「イスラム研究センター」

・研究テーマ「イスラムの社会と文化」

・拠点の長…私市正年 ・機構研究員…高橋圭



預言者ムハンマドの孫サイイダ・ザイナブの墓廟（ダマスカス）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

「附属イスラム地域研究センター」

・研究テーマ「イスラム世界の国際組織」

・センター長…小杉泰 ・機構研究員…仁子寿晴

財団法人東洋文庫「イスラム地域研究資料室」

・研究テーマ「イスラム地域研究史資料の収集・利用の促進とイスラム史資料学の開拓」

・室長…三浦徹 ・機構研究員…柳谷あゆみ



中国体アラビア書道家の馬国鋒氏による実演会の様子

現代中国地域研究



渋滞で込み合う
雲南省昆明市の
道路

早稲田大学アジア研究機構「現代中国研究所」

※ 現代中国地域研究幹事拠点

- ・研究テーマ「中国の発展の持続可能性」
- ・所長…天児慧 ・機構研究員…徐顕芬・弓野正宏

京都大学人文科学研究所「附属現代中国研究センター」

- ・研究テーマ「人文学の視角から見た現代中国の深層構造の分析」
- ・センター長…森時彦 ・機構研究員…袁広泉

慶應義塾大学東アジア研究所「現代中国研究センター」

- ・研究テーマ「中国の政治的ガバナンス」
- ・センター長…国分良成 ・機構研究員…江藤名保子

東京大学社会科学研究所「現代中国研究拠点」

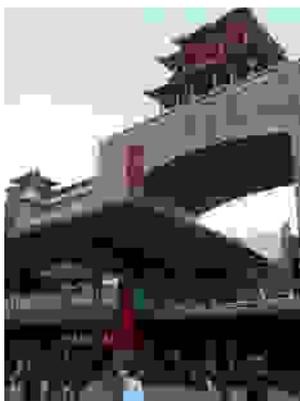
- ・研究テーマ「中国経済の成長と安定」
- ・運営委員長…田嶋俊雄 ・機構研究員…加島潤

人間文化研究機構総合地球環境学研究所「中国環境問題研究拠点」

- ・研究テーマ「中国の社会開発と環境保全」
- ・リーダー…窪田順平 ・機構研究員…松永光平

財団法人東洋文庫「現代中国研究資料室」

- ・研究テーマ「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」
- ・室長…高田幸男 ・機構研究員…大澤肇



出稼ぎにやってくる人々で込み合う北京西駅

現代インド地域研究



微妙な均衡を保つ
クリシュナのバターボール

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

「附属現代インド研究センター」

※ 現代インド地域研究中心拠点

- ・研究テーマ「現代インドの生存基盤・社会・政治」
- ・センター長…田辺明生 ・機構研究員…中溝和弥・石坂晋哉

東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター「現代インド研究部門」

- ・研究テーマ「現代インドの経済発展と環境変動」
- ・部門の長…水島司 ・機構研究員…和田一哉

広島大学「現代インド研究センター」

研究テーマ「現代インドの空間構造と社会変動」

- ・センター長…岡橋秀典 ・機構研究員…宇根義己



イスラーム建築として名高いチャール・ミーナールより眺めた
ハイダラーバードの街並み

人間文化研究機構国立民族学博物館「現代インド研究拠点」

- ・研究テーマ「現代インドの文化と宗教の動態」
- ・拠点代表…三尾稔 ・機構研究員…池亀彰

東京外国語大学「現代インド研究センター」

- ・研究テーマ「現代インドにおける文学・社会運動・ジェンダー」
- ・センター長…粟屋利江 ・機構研究員…杉本浄

龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター「現代インド研究センター」

- ・研究テーマ「現代政治に生きるインド思想の伝統」
- ・センター長…長崎暢子 ・機構研究員…志賀美和子

人間文化にかかわる総合的研究推進

IX 講演会・シンポジウム

人間文化研究機構では、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館という専門を異にする6つの研究機関が結ばれたメリットを生かし、より新しく、より幅の広い人文科学の創出をめざすとともに、さまざまな研究活動を展開しています。これによって得られた学問的成果を広く知ってもらうために、定期的に公開講演会・シンポジウムを開催します。

講演会・シンポジウムの内容は広報誌『人間文化』に掲載し公開しています。

人間文化研究機構第12回公開講演会・シンポジウム
「知の役割 知のおもしろさ—人間文化研究のめざす道を考える」

平成22年7月9日

有楽町朝日ホール

人間文化研究機構第13回公開講演会・シンポジウム
「食:生物多様性と文化多様性の接点」

平成22年7月16日

有楽町朝日ホール



広報誌「人間文化」Vol.10



広報誌「人間文化」Vol.11



第12回公開講演会・シンポジウム

「知の役割 知のおもしろさ—人間文化研究のめざす道を考える」



第13回公開講演会・シンポジウム

「食:生物多様性と文化多様性の接点」



第11回公開講演会・シンポジウム

「ウチから見た日本語、ソトから見た日本語」

知的財産

人間文化研究機構では、機構を構成する大学共同利用機関それぞれが専門とする学問分野はもちろん、自然環境をも視野に入れつつ、旧来の学問の枠を超える総合的研究を推進し、わが国および諸外国の大学などの多数の研究者と協力して、人間文化に関する新しいパラダイムの創出をめざして研究活動を実施しています。

これらの研究活動によって生み出されるさまざまな研究成果は、社会の中で蓄積・活用されることによって新たな社会的資本を生み出し、結果として社会における知的資産を豊かにします。そのためには、これらの成果が、それを生み出した本機構や研究者のもとにおいて、適正に保護された知的財産としてのあつかいを受けるとともに、そ

れらを積極的に公開し、社会における利用に供するための措置を講じておく必要があります。

そこで本機構では、機構本部事務局に知的財産管理室を設置して、研究の過程で創出されたさまざまな著作物などの知的財産を管理・運用し、社会に還元するための体制を整備してきています。

本機構では、機構としてのデータベースに加えて、各機関独自にも研究支援のためのデータベースを数多く構築してきており、これらデータベースを、インターネットなどを通じて広く公開しています。各機関が所蔵する資料や写真などの熟覧・貸与、著作物の使用許諾などに関しては、知的財産管理室を中心として対応してきています。

また知的財産管理室では、各種セミナーなどを開催して、著作権法の改正などが行われた場合にはいち早く研究者への周知を図るなど、知的財産に関して広く研究者の理解がおよぶための方策も講じています。

さらに本機構では、自然科学研究機構、高エネルギー加速器研究機構、情報・システム研究機構の3大学共同利用機関法人とともに大学共同利用機関法人知的財産活動連絡会を組織して、各大学共同利用機関法人相互の情報交換や知的財産担当者のスキルアップなどの研修を行い、大学共同利用機関としての社会貢献活動の活性化にも貢献しています。

◆ 例えばこのような物にも著作権があります

「展示ケース用の可搬型空気循環式恒温恒湿システム」



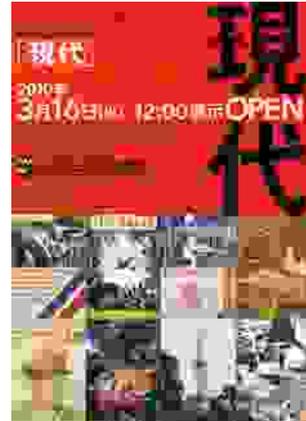
考案したシステムを付加した展示ケースは、右手の送風ダクト2本、左手の吸気ダクト3本により、内部の温湿度を一定管理できる。 国立民族学博物館



上記システム特許証
(平成21年12月25日 取得)



手提げ袋



ポスター

研究活動アーカイブ

連携研究

平成21年度連携研究

日本とユーラシアの交流に関する総合的研究

研究課題 ユーラシアと日本：交流と表象

(研究代表者：国立歴史民俗博物館 久留島浩)

●シンポジウム

- 国際シンポジウム「近代日本のなかの韓国併合—人物と戦争の観点から—」/明治大学(平成21年11月14日)
- 国際シンポジウム「中国南北の国境地域における諸民族の交流と文化の動態」/国立民族学博物館(平成21年12月12日)
- 国際シンポジウム「ユーラシアと日本—交流と表象の総括と課題—」/国立民族学博物館(平成22年2月27日～28日)
- 国際シンポジウム「アメリカ移民の過去・現在・未来」/国立歴史民俗博物館(平成22年3月20日)
- 国際シンポジウム「Double-reed Instruments in Eurasia : History, Context and Representation」/Paññāsāstra University of Cambodia(平成21年12月12日～13日)

●刊行物

- 人間文化叢書ユーラシアと日本—交流と表象—
『中国国境地域の移動と交流—近現代中国の南と北—』
- 『民博通信』「国境の人びと」
- 『東アジア内海世界の交流史—周縁地域における社会制度の形成—』
- 『国民国家の比較史』
- 『近代日本のなかの韓国併合』
- 『思想』「韓国併合」100年を問う」
- 『社会とは何か—システムからプロセスへ』
- 『移民政策へのアプローチ—ライフサイクルと多文化共生—」在日コリアンの墓と死にまつわる儀礼」
- 『自己言及的民族誌の可能性』「自己言及する文化人類学者」
- 『まほら』「青いドームを眺めながら—イギリスに生きる若いムスリム女性たち」
- 2008年度国際シンポジウム報告書『ユーラシアと日本 パフォーマンスと文化—ユーラシアと日本における交流と表象』
- 2009年度国際シンポジウム予稿集『ユーラシアと日本 交流と表象の総括と課題』
- カンボジア・国際シンポジウム報告書『Double-reed Instruments in Eurasia : History, Context and Representation』

研究課題 文化の往還

(研究代表者：国文学研究資料館 谷川恵一)

●シンポジウム

- 国際ワークショップ「ユーラシアと日本—時計と時間をめぐる比較文化—」/国文学研究資料館(平成21年11月23日～24日)

●刊行物

- 『文化の往還 研究成果報告書』(編集作業中含む)
- 所収論考
「時間システムと日本における文化的な変更」
「『罪と罰』の時間」
「イスラーム文明と時間—モスクでの礼拝時刻はいかに管理されてきたか」
「時計、時間規律、社会の加速—近現代日本における時間意識の変容」
「時間・時計・建築」
「ヒトの概日生物時計と「時」との関わり」
「巡礼における時空間と身体」
「伝統スポーツの伝承と時間」

研究課題 湿潤アジアにおける「人と水」の統合的研究

(研究代表者：総合地球環境学研究所 秋道智彌)

●シンポジウム

- 国際シンポジウム「水の未来可能性—文化多様性とともに」/総合地球環境学研究所・ユネスコIHP(国際連合教育科学文化機関 国際水文計画)・国際連合大学高等研究所(平成21年10月1日～3日)
- シンポジウム「湧水の恵みを未来へ」/大槌町立大槌中央公民館(平成21年11月7日)

●刊行物

- 『水と世界遺産』
- 『人と水 1 水と環境』
- 『人と水 2 水と生活』
- 『人と水 3 水と文化』
- 『鳥海山の水と暮らし—地域からのレポート』
- 『水と文明』

連携展示

うたのちから—和歌の時代史

平成17年10月18日～11月27日
国立歴史民俗博物館

うたのちから—古今集・新古今集の世界

平成17年10月28日～11月18日
国文学研究資料館

幻の博物館の「紙」

—日本実業史博物館旧蔵コレクション展
平成19年5月28日～6月15日
国文学研究資料館
平成20年1月16日～2月11日
国立歴史民俗博物館

百鬼夜行の世界

平成21年7月18日～8月30日
主催 国立歴史民俗博物館
国文学研究資料館
国際日本文化研究センター

研究資源の共有化

人間文化に関わる情報資源共有化研究会

第1回 平成20年12月15日

情報・システム研究機構 会議室

報告：「資源共有化事業・統合検索システムについて」(国立歴史民俗博物館：安達文夫)、「資源共有化事業・時空間システムについて」(京都大学：柴山守)、「日本学術会議地域研究委員会提言「地域の知」について」(東京大学：岡部篤行・浅見泰司)、「京都大学人文科学研究所における情報資源研究」(京都大学：安岡孝一)、「東京大学史料編纂所の情報資源研究」(東京大学：横山伊徳)、「情報資源共有化推進にあたっての考慮点」(東京大学：石川徹也)

第2回 平成21年1月19日

情報・システム研究機構 会議室

報告：「人間文化研究機構資源共有化事業の第2期の展開について」(人間文化研究機構：石上英一)、「国立国語研究所のデータベースについて」(国立国語研究所：前川喜久雄)、「国立国会図書館のデジタルアーカイブ事業とPORTA」(国会図書館：大場利康)、「国立情報学研究所における統合的情報検索へのアプローチ」(国立情報学研究所：安達淳)

人間文化研究情報資源共有化研究会

第1回 平成21年5月29日

国文学研究資料館 5階機構会議室

テーマ：人間文化研究における研究情報資源共有化の展開と展望

「資源共有化事業の歩み 2000～2008年度」(人間文化研究機構：安永尚志)、「国立国語研究所の言語資源」(国立国語研究所：前川喜久雄)、「統合検索システムの概要と今後の展開」(国立歴史民俗博物館：安

達文夫)、「時空間システムの成果と今後の展開」(総合地球環境学研究所:関野樹)、「総合地球環境研究所の地域・環境情報ネットワーク事業の紹介」(総合地球環境学研究所:関野樹)、「東京大学史料編纂所における横断検索システムの構築」(東京大学:近藤成一、石上英一)

第2回 平成21年7月16日

国文学研究資料館 5階機構会議室

テーマ:諸機関・諸プロジェクトにおける研究資源情報化と相互連携の可能性-I

「錦絵の公開と共有化」(国立歴史民俗博物館:大久保純一)、「外邦図研究と外邦図デジタルアーカイブの構築」(大阪大学:小林茂、東京大学:山本健太)、「京都大学研究資源アーカイブの構築」(京都大学:五島敏芳)、「沖縄の歴史情報研究」の成果と課題」(琉球大学:豊見山和行)、「文字字形総合データベース作成の試み」(奈良文化財研究所:馬場基、東京大学:井上聡)

第3回 平成22年1月29日

総合地球環境学研究所 講演室

テーマ:諸機関・諸プロジェクトにおける研究資源情報化と相互関連の可能性-II

「新CiNiiが招く学術知の世界」(国立情報学研究所:大向一輝)、「PORTAによるデジタルアーカイブの連携について」(国立国会図書館関西館:柴田昌樹)、「沖縄の歴史情報研究」(大阪国際大学:桶谷猪久夫)、「正倉院文書データベースSOMODA」(花園大学:後藤真)、「古事類苑全文データベースの構築について」(国際日本文化研究センター:山田奨治、国文学研究資料館:相田満)

知的財産

人間文化研究機構知的財産セミナー
平成20年度までに実施したセミナー

第1回「著作権をはじめとするさまざまな知的財産関係の具体的事例、疑問等に関する質疑応答」

講師:藤川義人(弁護士・弁理士、淀屋橋・山上合同法律事務所)

第2回「情報共有化時代の著作権」

講師:野口祐子(弁護士、クリエイティブコムズ・ジャパン事務局長/森・濱田・松本法律事務所)

第3回「文化資料の利用と著作権」

講師:尾崎史郎(独立行政法人メディア教育開発センター教授、元文化庁著作権課マルチメディア著作権室長)

第4回「知的財産に関する基礎知識」

講師:佐田洋一郎(国立大学法人山口大学教授、知的財産本部長)

第5回「写真・映像による研究成果公開と著作権・肖像権」

講師:岸本織江(横浜国立大学大学院国際社会科学研究所准教授)

平成21年度に実施したセミナー

第6回「写真・映像による研究成果公開と著作権・肖像権」

平成22年1月8日
総合地球環境学研究所講演室
講師:岸本織江(横浜国立大学大学院国際社会科学研究所准教授)

第7回「展示による研究成果公開と著作権・肖像権」

平成22年3月18日
泉ガーデンコンファレンスセンター
講師:吉澤敬夫(弁護士・不二法律特許事務所)
法的な整備が遅れている「肖像権」にかかわる過去の判例を中心に解説していただきました。

講演会・シンポジウム

人間文化研究機構公開講演会・シンポジウム

設立記念
「今なぜ、人間文化か」
平成16年9月25日
一橋記念講堂

第2回
「歩く人文学—人文学と社会の新しい関係」
平成17年6月25日
大阪国際会議場

第3回
「人が創った植物たち」
平成17年10月6日
有楽町朝日ホール

第4回
「人はなぜ花を愛でるのか?」
平成18年5月27日
国立京都国際会館

第5回
「人は、どんな手紙を書いたか—近代日本とコミュニケーション」
平成18年9月30日
一橋記念講堂

第6回
「世界に広がる日本のポップカルチャー—マンガ・アニメを中心として」
平成19年6月2日
有楽町朝日ホール

第7回
「国際開発協力へのまなざし—実践とフィールドワーク」
平成19年11月30日
IMPホール

第8回
「新しい近世史像を求めて」
平成20年6月8日
東商ホール

第9回
「源氏物語の魅力」
平成20年10月13日
有楽町朝日ホール

第10回
「百鬼夜行の世界」
平成21年7月11日
有楽町朝日ホール

第11回
「ウチから見た日本語、ソトから見た日本語」
平成21年12月5日
有楽町朝日ホール



第11回公開講演会・シンポジウム
「ウチから見た日本語、ソトから見た日本語」ポスター

各機関の活動



国立歴史 民俗博物館

NATIONAL MUSEUM OF JAPANESE HISTORY



国立歴史民俗博物館

概要

国立歴史民俗博物館(歴博)は、昭和56年(1981)に大学共同利用機関として、設置されました。

歴博は、歴史・考古・民俗および情報資料の4研究系による学際的・総合的な協業に基づく研究を進めてきました。博物館は学術資料、情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供という一連の機能を有することを最大の特色としています。そこで、博物館という形態を活かした新しい研究スタイル「博物館型研究統合」を提唱することにしました。「博物館型研究統合」とは、〈資源〉〈研究〉〈展示〉という3つの要素を有機的に連鎖させ、さらにそれらの要素を国内外の人々と幅広く〈共有・公開〉することによって、博物館という形態を最大限に活かした研究を推進することです。

また、歴博の重要な役割は歴史資料・情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供(展示・出版、情報データベースなど)という一連の機能を、大学共同利用機関として国内外の研究者が存分に共同利用できることにあり、あわせて研究活動を通じて次代を担う研究者を育成することです。

その機能のうちでも展示は、歴博にとってきわめて意義ある事業のひとつです。開館以来27年を経た今、現状の総合展示は研究の進展を十分に反映しておらず、また、国際化および一般市民の知的需要にも応えきれていないということなどが

らリニューアルの要請が年々高まってきました。このような急激に変化する現代社会の要請に応えるためには、最新の研究成果を反映した総合展示の見直しが不可欠であり、新たに総合展示の全面的な新構築を実現する必要があります。そこで、総合展示リニューアル基本構想に基づき、国内外の研究者による展示プロジェクト委員会を組織し、十分に検討を行い、平成20年3月第3展示室(近世)、平成22年3月第6展示室(現代)をオープンし、現在、平成25年3月第4展示室(民俗)の新構築に向けて準備しています。

研究

歴博では、全国の大学、研究所などの研究者の参画を得て、専門を異にする複数の研究者が共通の研究課題のもとにプロジェクトを組織し、共同研究(基幹研究・基盤研究・開発型共同研究)を実施しています。基幹研究は、大きな研究課題のもとに学際的研究をめざす課題を設定したものであり、基盤研究は、収蔵資料の高度情報化や、新しい歴史研究の方法論的基盤を作るための課題を設定しています。この2つを「共同研究」の核とし、開発型共同研究を新たに創設し、新規課題の発掘と人材育成に取り組むこととしています。それぞれの平成22年度における研究テーマは次のとおりです。

基幹研究

- 民俗表象の形成に関する総合的研究
- 新しい古代像樹立のための総合的研究

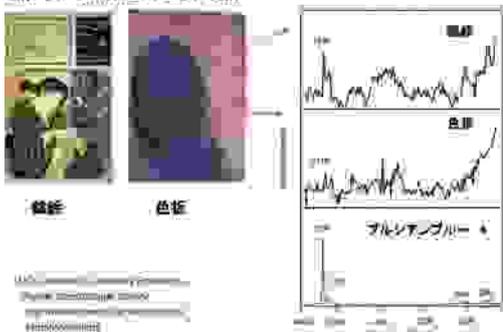
基盤研究

- 科学的資料分析研究
- 総合的年代研究
- 高度歴史情報化研究
- 博物館学的研究

開発型共同研究

- 縄文時代の人と植物の関係史
- 人の移動とその動態に関する民俗学的研究

測定例 東海道五十三対 鳴海



ラマン分光分析法による錦絵と版木の分析
「東海道五十三対 鳴海」三代歌川豊国画 国立歴史民俗博物館蔵

共同利用

資料収集

歴博では、実物資料・複製資料・音響映像資料およびこれに関連する資料を計画的・継続的に収集しており、平成22年5月現在、222,867点(うち国宝5点、重要文化財85点、重要美術品27点)を収蔵しています。また、蔵書冊数は314,213冊となっています。

情報提供

研究報告書の刊行

共同研究などの成果は『国立歴史民俗博物館研究報告』として刊行するとともに、研究情報を網羅した『国立歴史民俗博物館年報』、さらに歴史系総合誌『歴博』『展示図録』『資料図録』『資料目録』などを刊行しています。

データベースの公開

収蔵資料を広く公開し、研究利用に資することを目的とした館蔵資料データベースと諸分野の文献目録や共同研究の成果を収録したデータベース、記録類の全文データベース(平成22年3月末現在45本)を提供しています。



共同研究風景

平成21年度は予兆・ト占・禁忌・呪術に関する言い伝えを収録した俗信データベース(動物編)と『総合日本民俗語彙』他より収録した民俗語彙データベースの公開を行っています。

資料閲覧

研究者を対象とした資料閲覧(熟覧)のほか、近世・近代文書の実物またはマイクロフィルムと館蔵資料のマイクロフィルム紙焼製本(一部)の即日閲覧を実施しています。対象資料は順次追加しています。また、歴博が制作した民俗研究映像資料のDVDの貸出による閲覧も実施しています。

展示

総合展示

歴博の総合展示(常設)は、民衆の生活史に重点を置いて構成し、6つの展示室に分かれています。第1展示室から第3展示室では、原始・古代から中世を経て近世に至る歴史を時代順に配置し、第4展示室では民俗世界を、第5展示室では近代を、そして第6展示室では現代のテーマを配しています。また、今年度は第2展示室で重要文化財「洛中洛外図屏風甲本」を特別公開する他、平成22年3月の第6展示室の開室に合わせた特集展示「アメリカに渡った日本人と戦争の時代」も平成23年4月3日まで開催します。なお、第4展示室については展示内容の新構築にむけて、今年度下半期に閉室し準備を始める予定です。また、平成20年3月にリニューアルオープンした第3展示室では、ボランティアを導入して運営する体験コーナー「寺子屋れきはく」や、館蔵実物資料を中心にした特集展示「もの」からみる近世を開催します。今年度は下記のように5回の開催を予定しています。

「紀州徳川家伝来の楽器一琵琶一」

平成22年4月27日～6月20日

「伝統の朝顔」

平成22年8月3日～8月29日

「旗本本多家資料の世界」

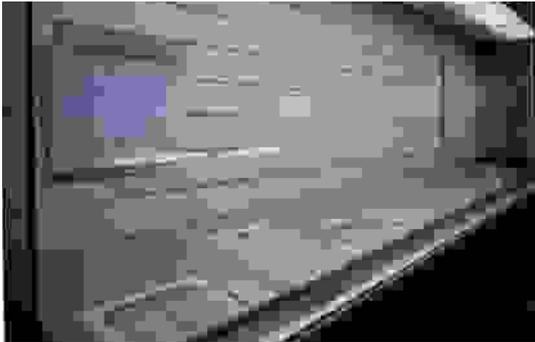
平成22年10月26日～12月5日

「双六の小宇宙」

平成22年12月21日～平成23年1月30日

「和宮ゆかりの雛かざり」

平成23年2月8日～4月3日



総合展示 第3展示室特集展示「錦絵にみる江戸の料理茶屋」



総合展示 第6展示室「闇市・露店」

企画展示

共同研究プロジェクトおよび資料収集の成果を公開するために年に数回の企画展示を行います。平成22年度は下記のとおり3回の展覧会を開催します。特に「アジアの境界を越えて」は人間文化研究機構連携展示として国立民族学博物館との共催で実施するもので、古代と近現代という二つの舞台から歴史のなかの「境界」を眺めるものです。

「アジアの境界を越えて」

平成22年7月13日～9月12日

「武士とはなにか」

平成22年10月26日～12月26日

「侯爵家のアルバム

—孝允から幸一にいたる木戸家写真資料—

平成23年3月1日～5月5日



企画展示「錦絵はいかにつくられたか」

くらしの植物苑

平成7年に開設した「くらしの植物苑」では、生活文化を支えてきた植物を系統的に植栽し「食べる」「織る・漉く」「染める」「治す」「道具をつくる」「塗る・燃やす」のテーマで、植物を通じてくらしの歴史を展示しています。また、特別企画「季節の伝統植物」として伝統的に栽培された園芸植物などに関する展覧会を、今年度は下記のとおり4回開催します。

「伝統の桜草」

平成22年4月20日～5月9日

「伝統の朝顔」

平成22年8月3日～8月29日

「伝統の古典菊」

平成22年11月2日～11月28日

「冬の華・サザンカ」

平成22年11月30日～平成23年1月30日



くらしの植物苑特別企画「伝統の古典菊」

社会連携

歴博では共同研究などの成果を展示という形だけでなく、さまざまな普及活動を通じて社会に還元しています。

歴博フォーラム・講演会の開催

研究成果を広く一般に公開するための「歴博フォーラム」と「歴博講演会」を開催しています。

子ども向け教育普及事業の実施

歴博の展示や研究活動を家族向けにわかりやすく解説したり、バックヤードの見学を主とした「歴博探検」や設問にしたがって資料を観察しながら展示室をめぐる「れきはくこどもワークシート」など、子ども向けの教育普及活動を実施しています。



歴博探検「古墳のたからもの」風景

専門職員研修事業などの実施

平成5年度から、歴史民俗系資料館の活動の充実に資するため、文化庁と共催で全国の歴史民俗系博物館・資料館の専門職員を対象に「歴史民俗資料館等専門職員研修会」を開催しています。

歴博の紹介

全国生涯学習フェスティバルなどにおいて歴博紹介を積極的に実施しています。

研究交流

海外の大学・研究機関・博物館と学术交流をめざし、平成22年5月1日現在、7件の交流協定を締結しています。



歴博フォーラム「東アジアの建築文化」

大学院教育

平成11年度から総合研究大学院大学文化科学研究科（日本歴史研究専攻）が置かれています。個別授業・基礎演習・集中講義の3つの形態の授業を行い、博士論文の作成指導と研究者としての能力の育成を図り、歴史学・民俗学・考古学・分析科学などの多分野にわたる研究者による複数教員の指導と基盤機関に所蔵されている実物資料の活用などをおし、広い視野を持った創造性豊かな研究者の育成を行っています。

大学院教育の協力の一環として、特別共同利用研究員制度を平成9年度から設けており、大学の要請に応じ歴史学・考古学・民俗学およびそれに関連する分野を専攻する大学院学生を受け入れ、必要な指導を行っています。

各機関の活動



国文学研究資料館

NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE



国文学研究資料館

概要

国文学研究資料館(国文研)は、文献資料の調査研究、収集、整理および保存などを目的として、昭和47年(1972)に設置されました。以来、大学などの研究者の協力を得ながら、国内外に所在する日本文学およびその周辺の資料について調査し、マイクロフィルムなどによる収集を行い、保存に努めています。また、集積した資料や情報は、閲覧、複写サービス、インターネットなどによるサービスを通じ、広く研究者および一般利用者に提供しています。

同時に、調査、収集した膨大な書誌情報を活用し、文学研究を資料や体系的、総合的に展開させる多面的な共同研究として、基幹研究、特定研究、国際連携研究、公募共同研究を企画し、実施しています。それらは、大学などの研究者と連携するとともに、海外の研究機関、また研究者の協力を得て積極的に取り組んでいます。

その他、展示、講演会、ワークショップなどを通じて、日本文学およびその周辺の文化資源の活用を図り、社会との連携を図っています。

平成20年3月に品川区から立川市に移転し、拡充した閲覧室や展示室などを活用して、共同利用機関としてより充実した活動を展開しています。

共同研究

国文研では外部委員が参加する共同研究委員会を設置し、資料の調査研究と国内外の諸機関との研究交流に基づき、日本文学などの基礎研究と国際研究の新たな研究の進展を図るため、以下の共同研究を行っています。

基幹研究

文献資史料に関する基礎研究を進展させる共同研究で、以下の3研究課題を実施しています。

- 王朝文学の流布と継承
- 19世紀における出版と流通
- 近世地域アーカイブズの構造と特質



「源氏物語歌合絵巻」国文学研究資料館蔵

特定研究

重要課題に取り組む共同研究で、以下の4研究課題を実施しています。

- 在米絵入り本の総合研究
- 近世的表現様式と知の越境—文学・芸能・絵画による総合研究—
- 陽明文庫における歌合資料の総合的研究
- 日本文学関連電子資料の構成・利用の研究



「風流七小町 卒塔婆」
国文学研究資料館蔵

国際連携研究

海外の研究者と連携して行う共同研究で、以下の課題を行います。

- オランダ国ライデンを中心とするシーボルト関係日本書籍資料の調査研究



ライデン国立民族学博物館

公募共同研究

国文研外の研究者から公募したテーマによる共同研究です。

- 近世風俗文化の形成－忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺－
- 久世家文書の総合的研究



淡路文化史料館における調査

共同利用

国内外に所蔵されている日本文学および関連資料の専門的な調査研究と、撮影・原本による収集を

行い、得られた所在・書誌を整理・保存しさまざまな方法で国内外の利用者に供することで、日本文学および関連分野の研究基盤を整備しています。

調査収集

全国の大学などに所属する研究者約200名の調査員と緊密に連携し、日本文学および関連する原典資料(写本・版本など)の所蔵箇所へ赴き、書誌的事項を中心とした調査研究を行っています。

また、調査研究に基づき、撮影許可が得られた原典資料を、マイクロフィルムまたはデジタル画像として全冊撮影して収集し、また必要に応じて原本による収集を行っています。

さらに、平成17年度から、他大学・他機関と締結した協定に基づく連携調査を行っています。

資料利用

国文研の図書館で閲覧・文献複写サービスを行っています。遠隔地の利用者でも、図書館間の相互利用制度により、資料の複写などのサービスが利用でき、電話での所蔵調査および文書での質問についても受け付けています。大学などに所属されていない方は、直接郵送またはFAXにより複写申込することもできます。



図書館

公開データベース

「国文学論文目録データベース」「日本古典籍総合目録データベース」を始め、研究者にとって不可欠なツールである計27のデータベースによる学術情報の提供を行っています。

社会連携

国文研では展示、講演、シンポジウム、セミナーなどの各種イベントを通じて、研究成果を広く社会に還元しています。

展示

国文研で行っている共同研究の成果などを公開するため、年5回程度、展示を開催しています。



国文学研究資料館展示室

通常展示

「和書のさまざま―書誌学入門」

平成22年4月15日～6月18日

本展示では、《本》のさまざまな形態を体系的に紹介しながら、日本の古典籍がどのように読み伝えられてきたのかをご覧ください。



通常展示「和書のさまざま―書誌学入門」の様子

人間文化研究機構 連携展示

「チベット ポン教の神がみ」

平成22年7月2日～9月10日

国立民族学博物館(大阪府吹田市)において平成21年4月23日～7月21日に開催した企画展「チベット ポン教の神がみ」を人間文化研究機構内で巡回する展示です。

特別展示

「鉄心斎文庫 短冊優品展」

平成22年10月4日～11月12日

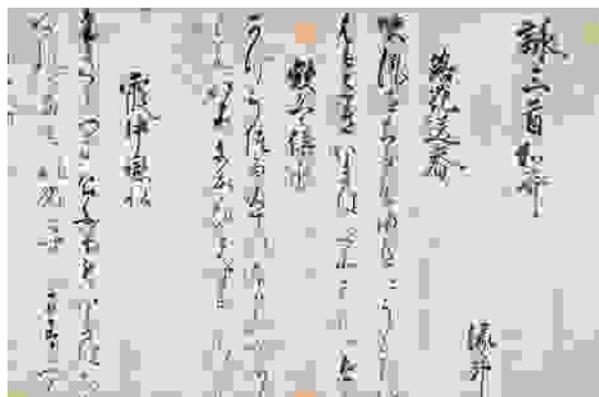
多くの貴重な国文学関係資料を所蔵する鉄心斎文庫の短冊資料を、国文研でこれまで行った研究会の成果をふまえ展示します。

通常展示

「新収資料展」

平成23年1月～2月

国文研の調査収集事業により、新たに国文研蔵となった資料について、一般に公開します。



「春日懐紙」国文学研究資料館蔵

国際日本文学研究集会

国内外の日本文学研究者の交流を深め、日本文学研究の発展を図るため、毎年秋に開催しており、平成22年度は11月27日、28日に「書物としての可能性―日本文学がカタチになるまで―」というテーマで開催します。

連続講演

日本文学の普及を図るため、古典文学の中で主要な作品やテーマを選び、第一線で活躍している研究者による連続的な講演会を開催しています。

平成22年度は九州大学名誉教授 中野三敏先生を講師にお迎えし開催する予定です。



平成21年度連続講演の様子

日本古典籍講習会

国内外で日本の古典籍をあつかっている図書館や文庫の司書を対象とし、古典籍の基礎知識・取りあつかいなどに関する講習会を開催します。講師は国文研教員および司書ならびに国立国会図書館司書などで、平成23年1月に開催します。

アーカイブズ・カレッジ

記録史料の保存と利用サービスなどの業務を担う専門職員（いわゆるアーキビスト）の研修、養成のため、長期コースと短期コースを開催します。講師は国文研教員などで、長期コースは7月～9月の間の計8週間、国文研で開催し、平成22年度の短期コースは名古屋大学（名古屋市）において11月8日～19日に開催を予定しています。

サテライト講座

都心の会場で、国文研の教員が一般の方向けに日本文学、および関連分野に関する講座を開催

しています。毎回テーマを決めて、国文研の研究成果をわかりやすくお話しします。

平成22年度は中世文学をテーマに開催する予定です。

子ども見学デー

子どもたちに日本の古い文化や本に親しんでもらうため、国文研が所在する立川市近隣の小学生を対象とし、文学に関するお話とカルタ取り大会などを内容として開催しています。



平成21年度子ども見学デーの様子

大学院教育

国文研には、総合研究大学院大学の文化科学研究科（日本文学研究専攻）が設置されています。総合研究大学院大学は、大学共同利用機関の人材と研究環境を基盤として、教育・研究を行っています。日本文学研究専攻では、従来の日本文学研究を、文化科学の視点から総合的にとらえ直す立場に立って、多面的な指導をしています。

また、特別共同利用研究員制度により、大学の要請に応じ大学院学生を受け入れ、研究指導に協力しています。

各機関の活動



国立国語研究所

NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS



国立国語研究所

概要

国立国語研究所(国語研)は昭和23年(1948)に創設され、独立行政法人を経て、平成21年(2009)10月1日に大学共同利用機関法人 人間文化研究機構の6番目の機関として設置されました。

新たに設置された国語研は、これまでの研究の蓄積をふまえながら、日本語学・言語学・日本語教育研究の中核拠点として、言葉の研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深め、国語および国民の言語生活ならびに外国人に対する日本語教育に貢献することを目的としています。日本語を世界諸言語のひとつと位置づけ、国内外の大学・研究機関と大規模な理論的・実証的共同研究を展開することによって日本語の特質の全貌を解明しようとしています。また、共同研究の成果や関連する研究文献情報を広く社会に発信・提供し、日本語教育、自然言語処理などさまざまな応用面に寄与することも重要な使命としています。

さらに、研究所の英語名称をNational Institute for Japanese Language and Linguistics(略称「NINJAL」)とし、日本語の言語学研究の国際的拠点となることを目指しています。

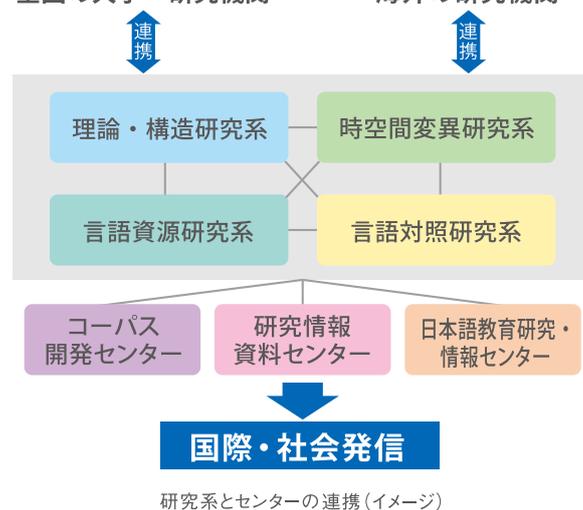
国語研は、4つの研究系と3つのセンターから成り立っています。言語の基本的な性質をあつかう「理論・構造研究系」、方言および歴史的な変化を

研究する「時空間変異研究系」、コーパスの構築・活用に関する基礎的研究を行う「言語資源研究系」、諸外国語との比較・対照を行う「言語対照研究系」の4研究系と、研究成果や研究文献情報の発信を行う「研究情報資料センター」、言語資源の開発を行う「コーパス開発センター」*、日本語教育研究を行う「日本語教育研究・情報センター」の3センターです。これらが密接に連携しながら研究活動と社会貢献活動を推進しています。

*コーパス(corpus)とは、書物・新聞・雑誌・会話など実際に用いられた言語資料を、その言語の実態を正確に反映するように組織的かつ大量に収集してコンピュータで検索できるようにしたものです。

全国の大学・研究機関

海外の研究機関



研究系とセンターの連携(イメージ)

研究

一般に言語というものは、人間として共通の生物学的・認知的基盤に根ざす「普遍的」な性質と、人間が生活している社会や文化の違いなどから生じる「個別的」な性質の両方を備えています。日本語に関しても、人間言語としての普遍性と日本語独自の個別性の区別に配慮しながらグローバルな観点から研究を進めることが重要です。国語研では、発音・文字・文法・語彙・方言・敬語・歴史的变化など日本語内部の諸相はもとより、諸外国語との比較対照や、言語習得、日本語教育、自然言語処理などの関連分野との学際的視点も含めた多角的、総合的な研究を実施し、個人や大学ではなしえない包括的な研究を推進しています。

「基幹型共同研究」は、日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組む大規模プロジェクトです。4研究系の専任教授および客員教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により、現在、計13件のプロジェクトを全国的、国際的レベルで展開しています。また、中・小規模のプロジェクトとして独創性に富む斬新な研究課題をあつかう「独創・発展型共同研究」と、新しい研究領域の創成が将来期待される「萌芽・発掘型共同研究」を開始しています。さらに、日本語教育研究・情報センターの共同研究プロジェクトを始動させ、公募型共同研究の推進体制の整備も進めています。

研究系の基幹型共同研究プロジェクト

人間の言語をめぐる現象は、さまざまな要素が複雑に絡みあっています。ひとつの現象を分析する場合も、「構造」、「変異」、「他言語との比較」といった多様な観点や角度から研究を行う必要があります。以下に示す基幹型共同研究も、4研究系が別々に研究を行うのではなく、相互に連携しながら総合的に推進しています。

理論・構造研究系

理論・構造研究系では、現代日本語の文法・統語、音声・音韻、語彙・形態、意味・語用、談話、文字・表記にかかわる理論的・実証的・実験的研究を行います。現在は、レキシコン(語彙、単語)をキーワードとして、その音韻特性、語形成の文法的・意味的・形態的特性、文字環境のモデル化などの共同研究を始動させています。

時空間変異研究系

時空間変異研究系は、現在および過去における地理的・社会的変異、歴史的変化の様相を解明することを目標に、方言の全国調査、琉球など消滅危機方言の調査、現代日本語の動態の解明、海外における日本語変種の形成過程といった共同研究に取り組んでいます。



方言の聞き取り調査

言語資源研究系

言語資源の構築と活用に関する基礎研究を行う言語資源研究系では、従来の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を発展させるためにアノテーション(検索用情報)付与に関する基礎研究を行うとともに、新たな課題として、通時コーパスの設計とコーパス日本語学の創成のための基礎研究に着手しています。

言語対照研究系

言語対照研究系は、世界の諸言語との比較によって日本語の特質を明らかにすることを目標とし、体言締め文と名詞の文法化、主節と従属節の結びつきに関する制限、述語構造の意味の普遍性と多様性といった課題について、諸外国語の研究者と共同で言語類型論的研究を進めています。

センタープロジェクト

日本語教育研究・情報センター

第二言語(外国語)としての日本語の教育・学習をとりまくさまざまな今日的課題に対して、国内外の日本語教育に関する研究情報を収集するとともに、学習者の日本語コミュニケーション能力に関する実証的研究を行い、それらの成果を社会に発信・還元します。

共同利用

研究成果の公開

平成22年4月より、研究所のホームページの全面リニューアルを行い、旧国語研の成果も含めて

一般向けおよび専門家向けのコンテンツを充実させ利便性の向上を図りました。

<http://www.ninjal.ac.jp/>

また、国語研で行われる共同研究や国際シンポジウムなどの成果を広く社会に公開・還元するために、海外への発信をも意図した3種類の学術専門情報誌および報告書『国語研プロジェクトレビュー』、『国語研オケージョナルペーパー』、『国語研共同研究報告』を電子媒体あるいは紙媒体で逐次刊行するとともに、国内外の出版社から学術書を出版していきます。

研究情報の公開

国内外の研究者の共同利用に供するため、研究情報資料センターが中心となって、日本語学・言語学の諸領域ならびに日本語教育に関連する研究文献情報を集積・整理してウェブで公開していきます。旧国語研で書籍として出版していた『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』は、コンテンツを統合してウェブで提供し、利便性の向上を図りました。

コーパスの公開

コーパス開発センターにおいては、『日本語話し言葉コーパス』を引き続き公開するとともに、現在構築中のKOTONOKHAコーパスの一部を試験的に公開・提供しています。



検索デモンストレーション
<http://www.kotonoha.gr.jp/demo/>

データベースの公開

『方言文法全国地図』に基づく方言資料のデータベースや、これから新しく収集・蓄積する資料、共同研究から得られた資料・成果のデータベースなど、多彩な情報をウェブで提供していきます。



『方言文法全国地図』
（「高くなる」という言葉の方言分布図）

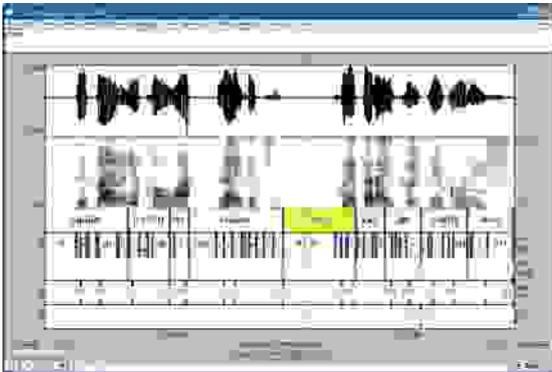
研究図書室

日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵しています。全国で唯一の日本語に関する専門図書室で、ウェブからの蔵書検索もできます。

<http://libgw.ninjal.ac.jp/mylimedio/search/search-input.do>

日本関連在外資料の調査

海外にある貴重な日本語資料を、海外の研究機関の協力を得ながら調査・収集し、日本関連在外資料研究の推進に貢献します。



『日本語話し言葉コーパス』の韻律ラベル



音声を書き起こした転記ファイル

社会連携

特色ある研究を通じた社会とのつながり

多数の共同研究プロジェクトの中で、とりわけ社会とのつながりが強い次の3つに力を注いでいます。

- 「消滅危機方言の研究」 ユネスコは世界各地における消滅危機言語を公表し、日本に関しては8つの言語(方言)が消滅危機と認定されています。これらの世界的に貴重・希少な日本語諸方言を集中的に記録・保存し、先端的な理論研究によって分析することで、世界規模で展開されている危機言語研究に貢献するとともに、それら諸方言が用いられている地域社会の活性化にも寄与します。文化庁が計画する危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業に協力していきます。
- 「日本語コーパスの研究」 現代日本語コーパ

スの構築を推進し、同時に古典語を含む史的コーパスにも拡大することによって、欧米と比して遅れを取っていたコーパス日本語学を世界レベルに引き上げるとともに、「言葉の資源」を言語研究者のみならず日本語教師、国語教師、外国人日本語学習者、マスコミ、機械翻訳など多方面で利用できるようにします。

- 「日本語教育に関する研究」 近年、在日外国人や留学生、あるいは海外での日本語学習者の増加にともない第二言語としての日本語教育に対するニーズが多様化しています。これらの諸問題を実証的に研究することにより、日本語教育の内容や方法の改善、日本語学習の効率化に貢献し、異文化摩擦などの社会的諸問題の解決にも寄与します。

公開学術講演会

日本語研究(日本語教育研究を含む)に関して、専門家向け、若手研究者向け、一般向けなど、さまざまなレベルと規模の学術講演会・研究集会を開催しています。

共同研究プロジェクトの公開研究集会

共同研究プロジェクトの中間報告を兼ねた公開研究集会を、プロジェクトごとに年に数回開催します。多くの皆様に参加できるように、会場は立川の国語研だけに限らず、研究の拠点となる諸大学でも開催する予定です。

大学院教育

一橋大学大学院言語社会研究科との連携大学院プログラムを実施していますが、これまでのプログラムについて検証を行い、大学のニーズに対応した新たなプログラム制度の検討を計画しています。また、博士課程学生に対して共同研究プロジェクト研究発表会で発表の場を提供するとともに、若手研究者を対象とした講習として、NINJAL(国語研)チュートリアルの実施を計画しています。



各機関の活動

国際日本文化 研究センター

INTERNATIONAL RESEARCH CENTER FOR JAPANESE STUDIES



国際日本文化研究センター

概要

国際日本文化研究センター(日文研)は、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究と世界の日本研究者に対する研究協力・支援を行うことを目的として、昭和62年(1987)に設置されました。以来、日本文化の独自性の研究のみならず、諸外国との文化比較や文化交流の視点をも重視し、国内外から参加するさまざまな専門領域の共同研究員による分野横断的な、日本文化に関する多様な研究を展開しています。

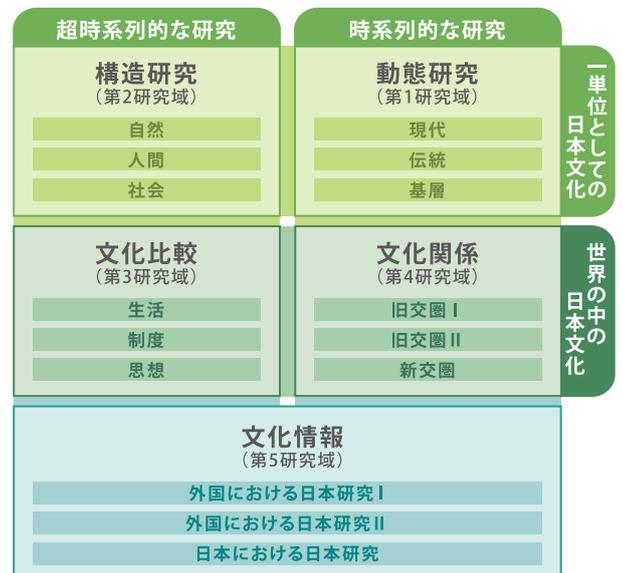
研究部門制を採用していない日文研では、共同研究を研究域・研究軸という枠組みのもとに位置づけ、特定の分野に偏らない、バランスのとれた共同研究を推進しています。その研究成果は、和文・英文による図書・学術雑誌、講演会、シンポジウムなどさまざまな形で、国内のみならず広く海外に提供しています。

研究協力としては、世界各地の日本文化の研究者・研究機関に、研究情報を発信するとともに、地域の実情に応じて日文研のスタッフを派遣して研究会を開催するなど、多面的な研究協力活動を行っています。

また、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻・博士後期課程では、次代の日本研究者養成を行っています。本専攻では、留学生も受け入れています。

研究

日文研における研究活動は、研究域・研究軸という枠組みのもとに行われています。この枠組みの原則は、日本文化の全体像を把握するための視座としてまず研究域を設け、次にその研究域を分節し、それぞれの研究域にいくつかの方向を特定するものとして研究軸を設ける、という形をとっています。



共同研究

日文研がもっとも力を入れているのは、共同研究方式の日本文化の研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。あわせて専門分野の枠組みを越えて、研究者が相互に知見を高め合う場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役割を果たすものと期待されます。また、共同研究では、日本と異なる知的伝統に立つ海外の研究者との交流をも重視しています。さらに、国際化時代といわれる今日、日本文化研究の多角的な国際化を図ることで、時代の要請に応えようとするものです。

このように、日文研における共同研究は、単なる研究成果の交流にとどまらず、専門分野および知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有し合うことによって生みだされる創造性に基づく成果をめざしています。

平成22年度は、19の課題による共同研究を行っています。



共同研究報告書

研究協力

日文研では、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究を行い、世界に開かれた国際的なセンターとしての責務を果たすため、諸外国から外国人研究者を受け入れています(平成22年5月1日現在、累計世界42か国、480名)。これら外国人研究者と日文研の教員や国内研究員との親密な学際的交流は、世界の日本研究促進の基盤となっています。

また日文研では、日本研究を行っている研究者を対象に研究協力活動を展開しています。この活動は、個々の研究者の研究交流を目的とする国際研究協力と、日文研が蓄積してきた研究情報の提供に大別することができます。

具体的には、研究会形式の研究交流を行う場の提供や、個人的な研究上の協力として研究相談などを実施しています。

国内開催の研究会

●「日文研フォーラム」は、来日中の外国人研究者による研究発表と交流の場の提供を目的に、毎月開催しています。テーマは日本文化に関連したも

ので1回で完結する形をとっています。この研究会は一般にも公開しています。

●「セミナー」「レクチャー」「シンポジウム」は、日文研の教員が専門領域のテーマを設定して開催するもの、および来日中の外国人研究者と日文研の教員が共同・協力して学際的なテーマを設定して開催するものがあり、研究者との交流をも目的としています。

●Nichibunken Evening Seminarは、外国人研究者の研究発表と国際交流を兼ねた英語によるセミナーです。

海外シンポジウム

平成7年度から海外においても研究活動・研究協力活動を行うため、年1回海外シンポジウムを実施しています。

平成21年度は、ジャワハルラル・ネルー大学(インド・デリー)において「アジア新時代の南アジアにおける日本像：インド・SAARC諸国における日本研究の現状と必要性」を実施しました。平成22年度はインドネシアで行う予定です。



海外シンポジウム

海外における日本研究会

平成11年度から、教員を年数回海外に派遣し、訪問した地域の日本研究者と協力して、現地の研究動向にそくしたテーマで小規模な研究会を開催しています。あわせて、研究相談など支援業務を行っています。この研究会は、日文研の設置目的である国際研究協力活動をより積極的かつ効果的に

行うことをめざしています。開催地の優秀な若手研究者の発掘につながることに加え、海外の日本研究の生の情報を得る貴重な機会にもなっています。

平成21年度は、インドネシア大学(インドネシア)・ベトナム社会科学院(ベトナム)にて開催しました。平成22年度は台湾で行う予定です。

海外研究交流シンポジウム

平成18年度から、海外の日本研究者とのネットワークをさらに強化し、恒常的でより親密な研究者交流をめざして、海外研究交流室が中心となり海外研究交流シンポジウムを実施しています。

平成21年度は、アルザス・ヨーロッパ日本学研究所(フランス)・ライデン大学(オランダ)の研究者を日文研に招いて開催しました。

国際研究集会

日本の文化、社会に対する世界各国の関心の高まりにともない、研究者の問題意識、研究方法も著しく多様化してきています。このような状況に対応するため、主として日文研での共同研究をテーマに、昭和63年から国際研究集会を開催し、日本研究発展のための国際的な討論の場を設けています。

また、各研究集会の期間中には、普及活動の一環として公開講演会を実施しています。

共同利用

図書館



図書館

中央に東屋風のサービスカウンターを配置した円形図書館は、3層の吹き抜け構造になっており、落ち着いた利用空間を提供しています。図書館では、日本研究に必要な各種資料を幅広く収集し、研究者の利用に供するとともに、さまざまな情報提供に努めています。平成7年に増設した資料館は、固定書架・電動集密書架のほか、貴重図書室、地図資料室、研究用個室、マイクロ資料室などが配置されています。また、自由接架方式を採用していますので、利用者は45万冊の図書を自由に手に取って閲覧することができます。

なお、個々の資料の配架場所・貸出状況は各フロアー配置の検索用端末機で調べることができます。

資料の収集

日文研における資料収集方針は、外国語で書かれた日本研究図書および訳書の網羅的収集、日本研究に必要な基本図書・雑誌の収集、日本研究に関する文献目録などの網羅的収集としています。その他、幕末明治期のガラス写真・色彩写真、古地図、ビデオ・CDなどの映像音響資料、科学史関連資料、医学史関連資料、日中関係資料なども積極的に収集しています。



色彩写真(四条大橋)

資料の利用

収集した図書・資料は広く研究者の利用に供しています。外部の方も学術研究・調査を目的に事前申請のうえ閲覧することができます。これらは、ウェブで検索でき、図書館間相互利用制度により文献複写

や現物貸借サービスを申し込むことができます。

データベースなどの公開

日文研が収集した日本研究資料、日文研教員の研究成果をはじめ、日文研以外の機関所有の日本研究資料などのデータベース化を推進し、現在49本のデータベースをウェブで公開しています。また、検索エンジンも備えていることから、世界中の幅広い日本研究の推進に役立てられています。平成21年度には、国際浮世絵学会との連携によって「浮世絵芸術」データベースを新たに制作しました。

ウェブでの公開は資料のデータベースばかりでなく、インターネット放送による学術講演会などの公開も行っており、講演会当日はリアルタイムで視聴可能です。平成9年度以降に行われた156本分の講演記録をインターネット放送で公開しています。



「浮世絵芸術」データベース

社会連携

「社会に開かれた研究機関」として、研究活動・研究協力活動により得られた成果を広く社会に還元するため、以下のような普及活動を行っています。

学術講演会

年3～4回、日文研講堂において、日文研の教員・外国人研究員による研究成果の発表と日本研究の普及を目的として学術講演会を開催しています。

東京講演会

毎年6月に、東京において日本研究の普及を目的に、総合テーマ「日本文化を考える」と題して日文研の教員・外国人研究員による講演会を開催しています。

公開講演会

日文研で開催される国際研究集会・国際シンポジウムの期間中に、普及活動・社会貢献の一環として公開講演会を開催しています。

一般公開

日文研の日頃の研究活動を広く社会一般に紹介することを目的に毎年秋に実施しています。教員による講演会やセミナーの開催をはじめとし、日文研所蔵の貴重図書・資料の展示、教員の案内による施設見学を行っています。

大学院教育

日文研には、大学共同利用機関を基盤機関とする総合研究大学院大学の文化科学研究科(国際日本研究専攻)が設置されています。同専攻(博士課程後期)には国外からの留学生を含む院生が学んでおり、国際的視野から学際的、総合的な日本研究を推進する教育と研究が行われています。

また、特別共同利用研究員制度により、大学の要請に応じて大学院生を受け入れ、研究指導に協力しています。

各機関の活動



総合地球 環境学研究所

RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANITY AND NATURE



総合地球環境学研究所

概要

平成13年(2001)に創設された総合地球環境学研究所(地球研)は、「地球環境問題の根源は、人間文化の問題にある」という基本認識のもと、「地球環境問題に関する総合的研究」を行うことを目的としています。地球環境問題の解決には、従来の科学技術的方法だけでは限界があります。必要なのは、自然科学系と人文学・社会科学系の研究者の協働であり、問題を個別ではなく、全体、総体として把握しようという姿勢です。第2期には、研究推進戦略センターに「基幹研究ハブ」をおき、全国の大学や研究機関との連携をもとに地球環境問題の解決をめざす「未来設計イニシアティブ」に沿った研究シーズの発掘や、研究成果の発信をめざします。地球研のめざす「総合地球環境学」は、別の言い方をすれば、地球環境問題に関する統合知consilienceを構築し、人間科学humanicsとして人間の生き方そのものを問う、ということになります。

そのために地球研では、環境問題の本質を「人間と自然との相互作用環」として解明し、問題の克服につながる道筋の探究などの研究に取り組んでいます。

地球環境学を構築するための研究枠組みとして、循環、多様性、資源、文明環境史、地球地域学

の5つの領域プログラムを設定しており、各研究プロジェクトはこの5つの領域プログラムのいずれかに属して、これらの枠組みにおける位置づけを常に明確にしなが、多様な課題に取り組んでいます。

また、平成19年(2007)に改組した研究推進戦略センターにおいては、地球研の研究プロジェクトを領域プログラムに収斂させながら、得られた成果の集積・分析・発信を進めるとともに、新たな研究を創出するための戦略を策定する重要な機能を担っています。

研究

地球研における研究は、研究プロジェクト方式と研究者任期制の2つの原則で進められています。研究部のスタッフはいずれかのプロジェクトを担当し、一部はプロジェクトリーダーとなって、国内外の研究者と共同研究を進めています。

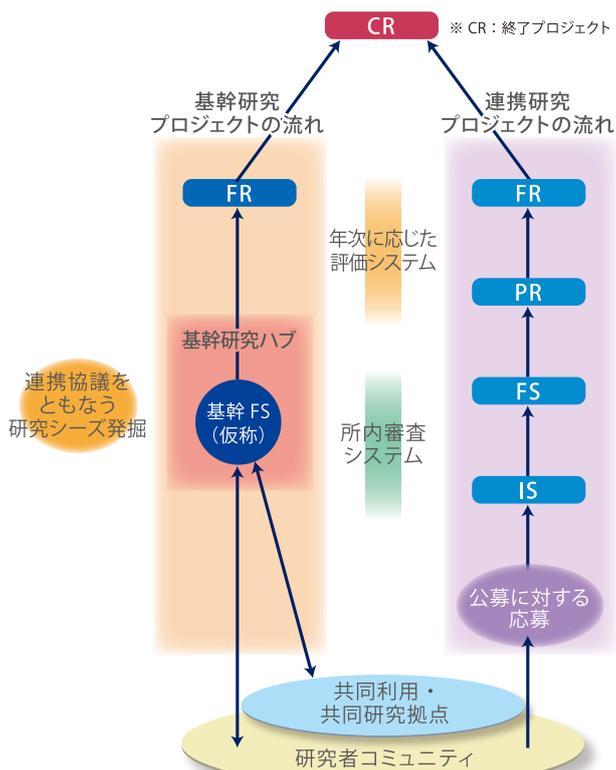
研究プロジェクト方式とは、基本的に独立したプロジェクトにおいて研究を実施することであり、立ち上げから終了後に至る各段階で、計画の妥当性、実行可能性、成果の意義について評価を受けることを根幹に置いています。

研究プロジェクトの立ち上げには、まず、所内外から公募によって採択されたインキュベーション研究(IS)を実施し、研究シーズが発掘されます。研究プロジェクトを企画する段階に至ったと判断されたものは、予備研究(FS、半年から1年間)を行います。その成果は、所内での討議・審査をふまえ、外国人研究者を含めた研究所外の研究者や有識者から構成される「研究プロジェクト評価委員会」で審査されます。適切と認められたものは、運営会議の承認を経て本研究(FR)に進むことができます。本研究は、プレリサーチ(PR、1年間の準備期間)を経て、3~5年の研究を実施します。

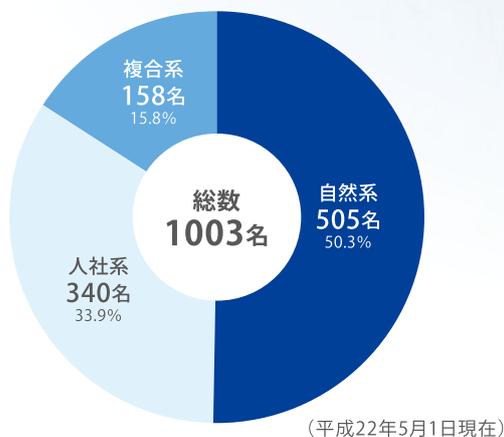
第2期中期目標・中期計画期間では、上述した手順に加えて、「地球環境学の構築」という地球研の目標実現に向けて、研究推進戦略センターに設

置された基幹研究ハブにおいて集中的・効率的に育成された基幹FS(仮称)を実施し、「基幹研究プロジェクト」として立ち上げていきます。

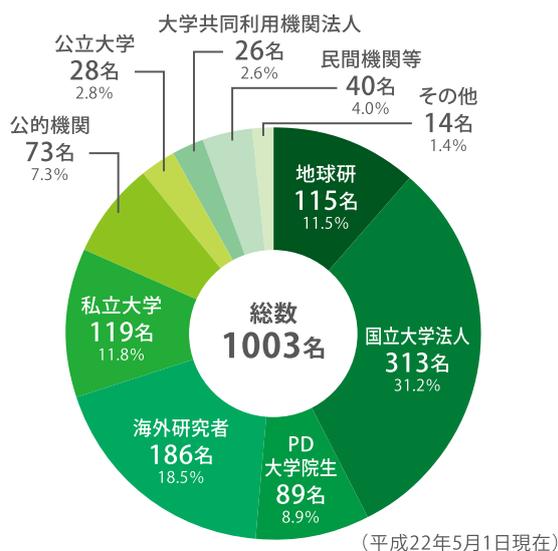
研究プロジェクトの立ち上げ方と進め方



平成22年度 研究分野構成比率



平成22年度 共同研究者所属機関構成比率



共同利用

頭脳の共同利用

地球研では平成21年度までにFR11本が終了し、その成果はさまざまな形で発信され、活用がなされています。平成21年度は、14本のFRと1本のPRにおいて、総勢1,000名を超える国内外の研究者が共同研究に参画しました。地球研の研究プロジェクトが、「広い意味での人間文化としての地球環境問題を考える」という基本方針に沿って進められていることから、研究プロジェクトには自然科学系から人文学・社会科学系までの非常に広い学問分野から研究者が参加しています。また、参加者の所属も、国公立大学や公的機関の研究所だけでなく民間研究機関などさまざまです。

調査研究フィールドの共同利用

地球研の研究プロジェクトが調査対象地としている調査研究フィールドは、国内はもとよりアジアを中心に世界各地に展開しています。このほとんどのフィールドにおいて、現地の研究者や実務者と密接に連携して研究プロジェクトの調査研究を進めています。

海外での共同研究は、関係機関と覚書や研究協力協定を結び、共同調査や分析の推進、資料や成果の共有、人的交流などを進めています。また、外国人研究者をプロジェクトの中核的メンバーとして受け入れています。さらに、地球研では、こうし

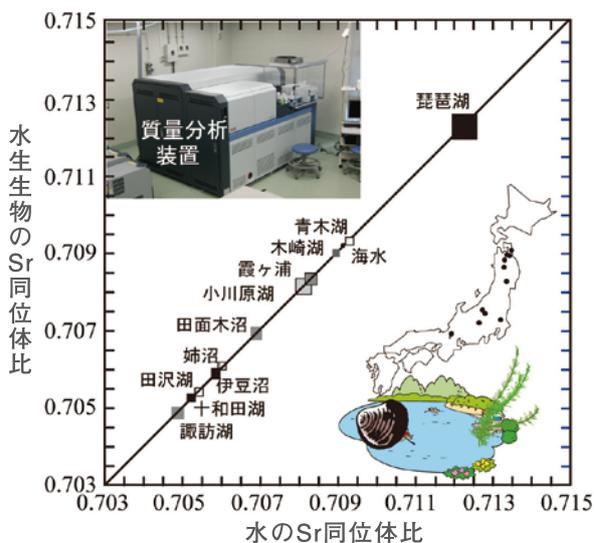
た共同研究の経験とネットワークを活かし、国内の関連研究機関と連携して、地域・環境に関する情報の共有を組織化することを進めています。



現地調査風景(ラオス サバナケット)

高精度分析機器の共同利用

地球環境問題の本質を理解する有効な最新手法として、安定同位体分析(物質の発生源や産地などの同定)やDNA分析(種や品種の決定)があります。地球研では高い精度をもつ最新鋭の設備を導入して、試料がもつ多種多様な環境情報を得るための技術開発と共に、新たな地球環境学の構築とその発信に向けて、情報の統合化と設備の利用促進を図っています。



質量分析装置による測定例

生物が水と同じSr同位体比(87Sr/86Sr)を示し、両者の値が地域によって異なることがわかった。この結果を利用すれば水産物の産地や耳石から魚の行動履歴を追跡できる。

社会連携

地球研フォーラム

地球研の理念や研究成果に基づいて、地球環境問題について幅広い問題提起やディスカッションを行うことを目的に、年1回開催しています。平成21年度は「よく生きるための環境—エコヘルスをデザインする」と題して開催しました。なお、平成22年度は次のとおり開催します。

第9回地球研フォーラム

「私たちの暮らしのなかの生物多様性」

開催日：平成22年7月10日

場所：国立京都国際会館



平成21年度 第8回地球研フォーラム

地球研市民セミナー

地球研の研究成果をわかりやすく一般市民に紹介することを目的に、本研究所または京都市内の会場において定期的に開催しています。地球研スタッフや所外研究者が講師となり、地球環境問題を具体例にそくして解説し、会場から熱心な質問が毎回寄せられています。平成16年から始まったこのセミナーも平成21年度末までに計37回開催しており、平成22年度はさらに6回程度開催する予定です。

地球研地域連携セミナー

地球研のある京都市から全国各地に出かけ、地元の大学、自治体などとの共催で公開講演会を

開催し、地域の有識者や市民の参加のもと、日本の地域ごとの環境と文化に関するさまざまな問題について活発な議論を行っています。平成21年度は長野県松本市および石川県金沢市にて開催しました。平成22年度は愛知県名古屋市にて開催を予定しています。

京都環境文化学術フォーラム「国際シンポジウム」 及びKYOTO地球環境の殿堂

京都環境文化学術フォーラム「国際シンポジウム」は、地球温暖化をはじめとする環境問題を解決するため、京都府、京都市などとともに開催する、環境・経済・文化などの分野にわたる国際的な学術会議です。生活の質を高めながら持続可能な社会を形成する新たな価値観や経済・社会のしくみを発信・提案することを目的としています。

また、KYOTO地球環境の殿堂は、「KYOTO地球環境の殿堂」運営協議会（京都商工会議所、環境省、地球研など）が中心となり世界で地球環境の保全に多大な貢献をした者の顕彰を行います。地球環境問題の解決に向けたあらゆる人びとの意志の共有と取組の推進に資することを目的としています。平成21年度の第1回KYOTO地球環境の殿堂入り者には、ケニア共和国のワンガリ・マータイさん等を表彰しています。



KYOTO地球環境の殿堂表彰式

出版物

ニュースレター『地球研ニュース』
(Humanity & Nature Newsletter)

地球研として何を考え、どのような活動を行っ

ているのか、また所員には誰がいて、どのような研究活動をしているかなどの最新情報を、研究者コミュニティに向けて発信するもので、隔月で刊行しています。特に地球研にかかわっている内外の研究者を対象に、コミュニケーションの場のひとつとして機能することをめざしています。

地球研叢書

地球研の研究内容や成果の意味を学問的にわかりやすく紹介する出版物で、広く一般書店にて販売されています。平成22年には『安定同位体というメガネー人と環境のつながりを診る』（和田英太郎・神松幸弘編、昭和堂、平成22年3月）などを刊行しました。

大学院教育

地球研では、地球環境学を担う若手研究者を育成する目的で、研究プロジェクトを連携して進めている名古屋大学と協定を交わし、平成22年度から同大学大学院環境学研究科の大学院生の研究指導に連携大学院方式で参加しています。このほかにも、今後の大学院教育の展開を視野に入れて、研究プロジェクトの実施と並行して、次の事業を推進しています。

ひとつ目は、国立大学法人などから大学院生を特別共同利用研究員として受け入れ、研究指導を行っています。特に、人間と自然の関係を対象とする人類学、植物学、生態学、地理学、農学など、地球環境学に密接に関連する分野の大学院生を積極的に受け入れています。

ふたつ目は、博士課程修了後の若手研究者をプロジェクト研究員として積極的に採用し、研究プロジェクトにおける研究に加えて、企画・運営や異分野研究者との交流へも参画させることにより、研究活動の「幅と奥行き」の拡大を意図した育成を行っています。

各機関の活動



国立民族学博物館

NATIONAL MUSEUM OF ETHNOLOGY



国立民族学博物館

概要

国立民族学博物館(民博)は、文化人類学・民族学に関する調査・研究を行い、その成果をとおし、世界の諸民族の社会と文化に関する情報を人びとに提供し、諸民族についての認識と理解を深めることを目的としています。昭和49年(1974)に大学共同利用機関として設置され、昭和52年には展示場を一般公開しました。

研究

機関研究

機関研究は、個人で行うのが難しい規模の大きな課題、学際的な追究を必要とする課題、広く人文社会科学に共通する重要な基礎的課題について、本館の組織をあげて取り組む研究です。文化人類学・民族学の研究センターとしての民博の特性を活かし、学術的、社会的要請に応えるために、分野横断的で先進的な課題を取り上げます。また、研究の過程では研究の国際化および国内外の研究機関との制度的連携を図ることにより、共同研究の高次化を推進します。

新たに法人第2期中期計画に基づく重点型共同研究としての機関研究が「包摂と自律の人間学」「マテリアリティの人間学」の2領域のもとに始動しました。これらは、文化人類学・民族学およ

び関係諸分野の発展に寄与し、人文社会科学の再編や新しい分野の創出に貢献することが期待されます。

共同研究

共同研究は、文化人類学・民族学および関連分野の特定のテーマについて、館内外の専門家が共同で行う研究です。平成21年度実施の課題数46件のうち、客員教員・特別客員教員を代表者とするものが8件、公募による館外の研究者を代表者とするものは15件です。共同研究員総数は、本館63名、国立大学214名、公立大学30名、私立大学225名、公的機関41名、民間機関など28名の、計601名です。

平成22年度からは若手研究者による共同研究についても、新たに募集枠を設け、公募することとしました。

各個研究

各個研究は、研究者個人が自由な発想に基づいて企画、立案し、実施する研究であり、人文社会科学の研究機関である民博の研究活動の基盤になるものです。

研究組織

民族社会研究部、民族文化研究部、先端人類科学研究部の3研究部と、2つのセンターがあります。

研究戦略センターは、文化人類学・民族学と周辺諸分野の最新の研究動向をふまえ、民博の研究活動の戦略を策定します。文化資源研究センターは、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて基礎研究や開発研究を行うとともに、事業推進の企画・調整を目的としています。

平成22年度からは、これまで蓄積された海外の研究機関・研究者との関係を活かしつつ、より戦略的・組織的な連携・協力を推進するため国際学術交流室を設置しました。

研究成果の公開

出版活動

各個研究、共同研究、国際シンポジウム、科学研究費補助金などによる研究の成果を広く社会に公開するために、『国立民族学博物館研究報告』『Senri Ethnological Studies (SES)』『Senri Ethnological

Reports(SER)』『国立民族学博物館研究年報』を出版しています。国内外の出版社からの刊行も制度的に奨励しており、平成21年度は7点の刊行物が出版されました。

研究成果公開プログラム

研究成果を効果的に公開し社会還元を図る目的で実施しています。平成21年度は、国際シンポジウム「子どもたちにとっての未来社会—北欧の思想と実践—」、研究フォーラム「アンデス言説をめぐるコンフリクト」など、あわせて13件の国際研究集会を実施しました。



国際シンポジウム
「子どもたちにとっての未来社会—北欧の思想と実践—」

共同利用

文化人類学・民族学を核とする諸分野の資料や情報を集積・整備して国内外研究者の共同利用に資するとともに、展示や各種事業などを通じて研究成果の社会還元を行っています。

民博所蔵の諸資料は、館内外における諸分野の研究や大学教育への活用、および他の博物館への貸し付けなどをとおして、共同利用に供しています。

標本資料: 275,298点、映像音響資料: 70,420点、文献図書資料: 図書621,183冊／雑誌16,314種、HRAF(Human Relations Area Files): 地域(民族集団)ファイル385ファイル／原典(テキスト)7,141冊。

平成18年度から「民族学資料共同利用窓口」を設置し、所蔵資料の利用に関する問い合わせに対応しています。

URL <http://www.minpaku.ac.jp/kyodomado.html>

平成21年度には「大学のためのみんぱく活用マニュアル」を作成し、研究や展示・所蔵資料およ

び施設などを大学教育に広く活用できるよう進めています。

みんぱく図書室

文献図書資料などの情報提供だけでなく、情報公開に積極的に取り組んでいます。国立情報学研究所NACSIS-CATへの遡及入力を継続して行っており、他大学図書館などからの文献複写や貸借の申込に対応しています。一般利用者への図書の館外貸出も行っています。また、図書室カウンターをフルオープン型にし、平成22年度からは、土曜日開室を始めました。

データベース

文化人類学・民族学にかかわる膨大な研究資料情報を、インターネットで館内外の研究者に提供しています。民博所蔵の標本資料や映像・音響資料、文献・図書資料などの目録情報をはじめ、「韓国生活財データベース」「中西コレクションデータベース—世界の文字資料—」「ボントック語音声画像辞書(英語版)」などがあります。多くは、画像情報を含んでいます。

展示

本館展示

本館展示は、世界を各地域に分けた地域展示と、音楽・言語の通文化展示を常設しています。地球規模の変化の時代に生きる人びとの暮らし、またその姿をいきいきと伝えるため、平成20年度より本館展示の新構築に着手し、アフリカ・西アジア展示に引き続き、平成21年度には音楽展示・言語展示・共同利用展示場を一般公開しました。平成22年度は、オセアニア展示およびアメリカ展示を新しくする予定です。



新しくなった音楽展示



新しくなった言語展示

また、本館展示場においては今日的な問題や先端の研究課題などを紹介する企画展示も開催します。平成22年は、人間文化研究機構の連携研究の成果である「水の器―手のひらから地球まで」展(3月25日～6月22日)などを開催しています。



企画展「水の器―手のひらから地球まで」

特別展示

特別展示は、特定のテーマに関する最新の研究成果を総合的・体系的に紹介する大規模な展示で、特別展示館において開催します。

「彫刻家 エル・アナツイのアフリカーアートと文化をめぐる旅」

平成22年9月16日～12月7日

ガーナ生まれナイジェリア在住の彫刻家エル・アナツイ(1944-)は、いまや世界的に知られているアーティストです。彼のインスタレーション作品と木彫を中心に展示し、同時に、それらの造形の文化的背景を民博の所蔵品や映像をとおして考えます。アートと文化人類学の二人三脚によって、現代美術への新しい見方を探る企画です。

社会連携

学術講演会

文化人類学・民族学をとおした異文化理解と、民博の学術研究機関としての役割を理解してもらうために、先端的な研究活動の成果を社会に積極的に還元しています。平成21年度は、公開講演会「人・家畜・感染症」(平成21年10月東京)、「ベリーダンスが世界をゆらす」(平成22年3月大阪)を実施しました。

国際連携

平成21年度は新たに、台湾の国立台北芸術大学および中国の故宮博物院と、それぞれに学術研究交流を目的とした協定を締結しました。また、順益台湾原住民博物館との協定に基づき、台湾原住民族に関連した民博所蔵の資料を、その収集地の台湾で活用することを目的に、国際連携展を開催しました。

国際協力機構(JICA)集団研修「博物館学集中コース」を、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で運営しています。博物館の運営に必要な実践的技術の研修を実施し、各国文化の振興に貢献できる人材を育成しています。



JICA集団研修「博物館学集中コース」

広報出版

『MINPAKU Anthropology Newsletter』『民博通信』『月刊みんぱく』などの定期刊行物、ならびに『国立民族学博物館展示ガイド』、特別展の展示図録や案内リーフレットなどの展示関連刊行物をとおして、研究やさまざまな活動を広報しています。

ゼミナール、ウィークエンド・サロン

研究部の教員などによる最新の研究成果に関する「みんぱくゼミナール」を毎月第3土曜日に実施しています。また、平成19年度からは、研究部の教員と来館者が展示場内で、より身近に語り合いながら、民博の研究を紹介する「みんぱくウィークエンド・サロンー研究者と話そう」を、ほぼ毎週日曜日に開催しています。

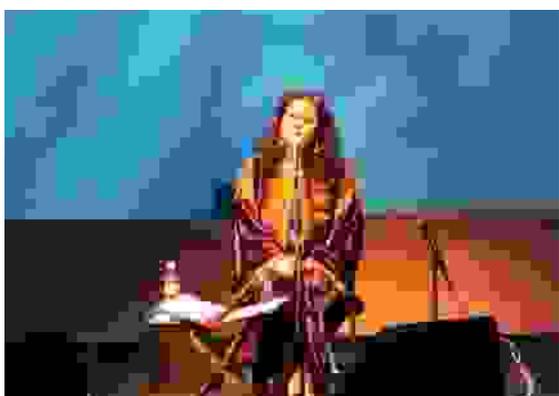


みんぱくウィークエンド・サロンー研究者と話そう

みんぱく映画会

文化人類学・民族学に関する貴重な映像資料を、教員の解説を交えて上映しています。平成21年度からは、機関研究に連動する「みんぱくワールドシネマ」映像に描かれる〈包摂と自律〉のシリーズをはじめ、特別展関連など計8回開催しました。

研究公演



研究公演「アラブ・アンダルシア宮廷音楽の馨り
ー＜モロッコの花＞アミナ・アラウィの典雅な歌声」

世界の諸民族の音楽や芸能などを紹介し、文化人類学・民族学への理解を深めてもらうことを目的としています。平成21年度は、「アフリカン・パーカッション セネガル・サバルの響き」「アラブ・アンダルシア宮廷音楽の馨（かお）りー＜モロッコの花＞アミナ・アラウィの典雅な歌声」など、計5件の公演を行いました。

新展示プロモーション

新構築したアフリカ展示および西アジア展示を広く社会へ紹介するために、「みんぱくフォーラム09夏一生まれかわったアフリカ展示」「春のみんぱくフォーラム2010年一西アジア再発見」として、写真展、研究公演、映画会、ギャラリートークなどの各種イベントを開催しました。

学習キット「みんぱく」

世界諸地域の衣装、楽器、道具、学用品などをスーツケースにパックした学習機材です。平成21年4月より「アイヌ文化にであう」を追加して10種類19パックを用意し、学校機関や各種社会教育施設を対象に貸し出しています。また、さまざまな教育プログラムに協力しています。

みんぱくe-news

研究情報や各種事業のお知らせを、月1回程度電子メールで配信しています。

URL <http://www.minpaku.ac.jp/e-news/>

大学院教育

民博には総合研究大学院大学の文化科学研究科(地域文化学専攻、比較文化学専攻)が設置されています。両専攻(博士課程後期)では、独創的な文化人類学・民族学の研究、長期のフィールドワークで得られた資料に基づく学位論文の作成、および広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成をめざしています。学生の受け入れを開始した平成元年に第1期生が入学して以来、課程博士46名、論文博士22名を輩出してきました。

また特別共同利用研究員の制度を設けて、国公私立大学の大学院学生を受け入れて指導することで、他大学の大学院教育に協力しています。

資料

委員会一覧

経営協議会

❖ 金田 章裕	機構長
小野 正敏	理事
中尾 正義	理事
石上 英一	理事
栗城 繁夫	理事(兼)事務局長
平川 南	国立歴史民俗博物館長
今西 祐一郎	国文学研究資料館長
影山 太郎	国立国語研究所長
猪木 武徳	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長
稲盛 豊実	(財)稲盛財団専務理事
岩男 壽美子	慶應義塾大学名誉教授
大原 謙一郎	(財)大原美術館理事長
栄原 永遠男	大阪市立大学特任教授
後藤 祥子	日本女子大学理事
高村 直助	横浜市歴史博物館館長
永井 多恵子	ジャーナリスト
平田 保雄	日経BP社代表取締役社長
藤井 宏昭	(独)国際交流基金顧問
古澤 巖	鳥取環境大学長
宮崎 恒二	東京外国語大学理事

教育研究評議会

❖ 金田 章裕	機構長
小野 正敏	理事
中尾 正義	理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
今西 祐一郎	国文学研究資料館長
影山 太郎	国立国語研究所長
猪木 武徳	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長
安田 常雄	国立歴史民俗博物館副館長
武井 協三	国文学研究資料館副館長
木部 暢子	国立国語研究所副所長
小松 和彦	国際日本文化センター副所長
佐藤 洋一郎	総合地球環境学研究所副所長/プログラム主幹
森 明子	国立民族学博物館研究戦略センター長

青柳 正規	国立西洋美術館長
大塚 柳太郎	(財)自然環境研究センター理事長
カイザー シュテファン	筑波大学名誉教授
窪田 幸子	神戸大学大学院国際文化学研究所教授
酒井 啓子	東京外国語大学大学院総合国際学研究院・先端研究部門(国際社会部門)教授
佐藤 宗諱	奈良女子大学名誉教授
森 正人	熊本大学大学院社会文化科学研究科教授
鷲田 清一	大阪大学総長

総合研究推進委員会

青柳 正規	国立西洋美術館長
大塚 柳太郎	(財)自然環境研究センター理事長
カイザー シュテファン	筑波大学名誉教授
窪田 幸子	神戸大学大学院国際文化学研究所教授
酒井 啓子	東京外国語大学大学院総合国際学研究院・先端研究部門(国際社会部門)教授
佐藤 宗諱	奈良女子大学名誉教授
森 正人	熊本大学大学院社会文化科学研究科教授
鷲田 清一	大阪大学総長
宮崎 恒二	東京外国語大学理事
羽田 正	東京大学東洋文化研究所長
榎原 雅治	東京大学史料編纂所長
岩井 茂樹	京都大学人文科学研究所副所長
平川 南	国立歴史民俗博物館長
武井 協三	国文学研究資料館副館長
影山 太郎	国立国語研究所長
小松 和彦	国際日本文化研究センター副所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
佐々木 史郎	国立民族学博物館副館長
小野 正敏	理事
❖ 中尾 正義	理事

評価委員会

❖ 金田 章裕	機構長
小野 正敏	理事
中尾 正義	理事
栗城 繁夫	理事(兼)事務局長
秋道 智彌	総合地球環境学研究所副所長(企画・連携・広報室)

大崎 仁	機構長特別顧問
久留島 浩	国立歴史民俗博物館副館長
寺島 恒世	国文学研究資料館教授
相澤 正夫	国立国語研究所副所長
牛村 圭	国際日本文化研究センター教授
渡邊 紹裕	総合地球環境学研究所教授
櫻永 真佐夫	国立民族学博物館研究戦略センター准教授
岩男 壽美子	慶應義塾大学名誉教授
鷺田 清一	大阪大学総長
宮崎 恒二	東京外国語大学理事
水田 健輔	(独)国立大学財務・経営センター教授
水本 邦彦	長浜バイオ大学教授
山本 真鳥	法政大学経済学部教授

機構会議

❖金田 章裕	機構長
小野 正敏	理事
中尾 正義	理事
石上 英一	理事
栗城 繁夫	理事(兼)事務局長
平川 南	国立歴史民俗博物館長
今西 祐一郎	国文学研究資料館長
影山 太郎	国立国語研究所長
猪木 武徳	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長

企画・連携・広報室会議

❖小野 正敏	理事
久留島 浩	国立歴史民俗博物館副館長
谷川 恵一	国文学研究資料館副館長
木部 暢子	国立国語研究所副所長
小松 和彦	国際日本文化研究センター副所長
秋道 智彌	総合地球環境学研究所副所長/研究戦略センター長
田村 克己	国立民族学博物館副館長

研究資源共有化事業委員会

❖石上 英一	理事
木部 暢子	国立国語研究所副所長
安達 文夫	国立歴史民俗博物館情報資料研究系教授
古瀬 蔵	国文学研究資料館複合領域研究系教授
高田 智和	国立国語研究所理論・構造研究系准教授
松田 利彦	国際日本文化研究センター研究部准教授
関野 樹	総合地球環境学研究所研究推進戦略センター准教授
山本 泰則	国立民族学博物館文化資源研究センター准教授
久保 正敏	国立民族学博物館文化資源研究センター教授
安永 尚志	国文学研究資料館名誉教授
柴山 守	京都大学東南アジア研究所地域研究ネットワーク部教授
原 正一郎	京都大学地域研究統合情報センター教授
栗城 繁夫	理事(兼)事務局長

地域研究推進委員会

❖金田 章裕	機構長
飯塚 正人	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所副所長
小野 元之	(独)日本学術振興会理事長
佐藤 慎一	東京大学理事・副学長
佐藤 次高	早稲田大学イスラーム地域研究機構長
斯波 義信	(財)東洋文庫特別顧問
田中 耕司	京都大学次世代研究者育成センタープログラムマネージャー
田辺 明生	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
田村 和子	共同通信社客員論説委員
長崎 暢子	龍谷大学人間科学・宗教・総合研究センター研究フェロー
	龍谷大学/東京大学名誉教授
濱下 武志	龍谷大学国際文化学部教授
平野 健一郎	早稲田大学/東京大学名誉教授
山田 辰雄	慶應義塾大学名誉教授
渡邊 幸治	(財)日本国際交流センターシニアフェロー
中尾 正義	理事/地域研究推進センター長
大崎 仁	機構長特別顧問
立本 成文	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長

日本関連在外資料調査研究委員会

※ 委員会は9月発足予定

※ ❖ 議長または委員長

資料

データ一覧

◆ 役職員数

(平成22年5月1日現在)

役員および職員(常勤)			外国人研究員	客員教員(国内)
機関名	種別	現員		
機構本部	役員	7	0	0
	地域研究推進センター研究員	20		
	事務・技術職員	25		
国立歴史民俗博物館	館長	1	0	7
	研究教育職員	41		
	事務・技術職員	40		
国文学研究資料館	館長	1	1	4
	研究教育職員	29		
	事務・技術職員	33		
国立国語研究所	所長	1	2	8
	研究教育職員	26		
	事務・技術職員	25		
	研究員	3		
国際日本文化研究センター	所長	1	15	17
	研究教育職員	31		
	事務・技術職員	33		
総合地球環境学研究所	所長	1	3	14
	研究教育職員	27		
	事務・技術職員	24		
国立民族学博物館	館長	1	4	5
	研究教育職員	55		
	事務・技術職員	41		
計	役員	7	25	55
	館長・所長	6		
	研究教育職員	209		
	地域研究推進センター研究員	20		
	事務・技術職員	221		
	研究員	3		

(単位:人)

非常勤研究員等

(平成22年5月1日現在)

種別	国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国立国語研究所	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
機関研究員	2	5	0	6	0	6	19
リサーチ・アシスタント	0	15	0	1	3	10	29
プロジェクト研究員	0	0	2	11	71	0	84

(単位:人)

◆ 予算

収入	平成22年度	平成21年度
運営費交付金	12,771	12,287
施設整備費補助金	324	724
国立大学財務・経営センター施設費交付金	609	475
自己収入	289	266
産学連携等研究収入及び寄付金収入等	344	342
目的積立金取崩	-	349
計	14,337	14,443

(単位:百万円)

◆ 施設一覧

(平成22年5月1日現在)

区分	本部	国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国立国語研究所	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
土地面積	-	129,496	18,308	23,980	31,120	31,354	40,821	275,079
建物床面積	643	35,784	16,736	14,523	16,140	12,887	51,225	147,938

(単位:㎡)

◆ 共同研究の件数および共同研究員数 在籍 (平成21年度)

機関名	共同研究件数	総数	共同研究員の所属機関の内訳						
			国立大学等	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	左記以外
国立歴史民俗博物館	42	543	331	14	97	44	16	21	20
国文学研究資料館	17	273	123	11	101	15	7	3	13
国立国語研究所	23	324	208	17	70	3	1	14	11
国際日本文化研究センター	15	571	217	19	198	31	27	32	47
総合地球環境学研究所	28	1,206	657	37	146	87	36	220	23
国立民族学博物館	46	828	383	37	244	44	19	69	32
計	171	3,745	1,919	135	856	224	106	359	146

(単位:件、人)

◆ 研究者の受け入れ・派遣 (平成21年度)

種別	国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国立国語研究所	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
日本学術振興会特別研究員	0	1	0	1	0	7	9
日本学術振興会外国人特別研究員	0	0	1	1	1	2	5
その他外来研究員	6	11	11	12	3	56	99
外国人研究員招へい	4	2	4	26	11	13	60

(単位:人)

◆ 外部資金の受け入れ

科学研究費補助金(申請件数)

機関名	平成22年度	平成21年度	平成20年度
機構本部	1(0)	1(0)	0(0)
国立歴史民俗博物館	29(15)	31(23)	41(25)
国文学研究資料館	38(23)	45(34)	44(34)
国立国語研究所	36(14)	-	-
国際日本文化研究センター	15(11)	18(12)	13(6)
総合地球環境学研究所	67(48)	71(53)	59(41)
国立民族学博物館	61(28)	71(39)	51(30)
計	247(139)	237(161)	208(136)

(単位:件、カッコ内は新規分で内数)

科学研究費補助金(採択件数)

機関名	採択件数・金額	平成21年度	平成20年度	平成19年度
	件数	1(0)	0(0)	0(0)
金額	4,600	0	0	
国立歴史民俗博物館	件数	16(8)	24(8)	27(7)
	金額	61,733	139,525	157,300
国文学研究資料館	件数	26(15)	21(11)	26(8)
	金額	89,400	65,700	74,700
国立国語研究所	件数	27(13)	-	-
	金額	122,283	-	-
国際日本文化研究センター	件数	6(0)	11(1)	9(6)
	金額	36,060	46,266	43,600
総合地球環境学研究所	件数	33(15)	33(15)	30(13)
	金額	78,580	64,140	77,114
国立民族学博物館	件数	47(17)	38(14)	38(16)
	金額	131,860	118,240	134,000
計	件数	156(68)	127(49)	130(50)
	金額	524,516	433,871	486,714

(単位:件、千円 カッコ内は新規分で内数)

受託研究

機関名	受け入れ	平成21年度	平成20年度	平成19年度
国立歴史民俗博物館	件数	2	0	1
	金額	3,370	0	1,272
国文学研究資料館	件数	0	0	1
	金額	0	0	910
国立国語研究所	件数	0	-	-
	金額	0	-	-
国際日本文化研究センター	件数	2	1	2
	金額	5,032	4,100	6,854
総合地球環境学研究所	件数	13	8	8
	金額	78,299	58,725	55,004
国立民族学博物館	件数	2	3	3
	金額	1,380	6,510	16,300
計	件数	19	12	15
	金額	88,081	69,335	80,340

(単位:件、千円)

寄附金

機関名	受け入れ	平成21年度	平成20年度	平成19年度
国立歴史民俗博物館	件数	2	2	1
	金額	5,210	3,000	1,000
国文学研究資料館	件数	39	30	99
	金額	1,200	1,439	8,114
国立国語研究所	件数	0	-	-
	金額	0	-	-
国際日本文化研究センター	件数	4	7	10
	金額	2,000	9,663	15,447
総合地球環境学研究所	件数	5	6	3
	金額	10,375	7,520	2,500
国立民族学博物館	件数	6	9	19
	金額	10,910	5,128	19,649
計	件数	56	54	132
	金額	29,695	26,750	46,710

(単位:件、千円)

その他の外部資金

機関名	受け入れ	平成21年度	平成20年度	平成19年度
国立歴史民俗博物館	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国文学研究資料館	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国立国語研究所	件数	0	-	-
	金額	0	-	-
国際日本文化研究センター	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
総合地球環境学研究所	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国立民族学博物館	件数	2	1	1
	金額	3,700	1,200	8,000
計	件数	2	1	1
	金額	3,700	1,200	8,000

(単位:件、千円)

◆ データベース一覧 (平成21年度作成分)

国立歴史民俗博物館

分類	名称
データベースれきはく	俗信データベース
	民俗語彙データベース

国立民族学博物館

分類	名称
目録情報データベース	音響資料目録データベース
	音響資料曲目データベース
	映像資料目録データベース
研究情報データベース	タイ民族誌映像データベース-精霊ダンス-

国文学研究資料館

分類	名称
総記	アーカイブズ学文献データベース

国立国語研究所

分類	名称
国語研データベース	現代日本語書き言葉均衡コーパス
	日本語研究・日本語教育文献データベース(仮称)
	日本語学習者会話データベース

国際日本文化研究センター

分類	名称
機関連携DB	浮世絵芸術データベース

※公開されているデータベースは7頁に掲載しております。

◆ 大学院教育 総合研究大学院大学

学位授与状況

(平成21年度)

文化科学研究科	文学	14
	学術	4

(単位:人)

在学生数

(平成22年5月1日現在)

	研究科	専攻	機関	3年(1年次)	4年次(2年次)	5年次(3年次)	計
後期3年博士課程	文化科学	地域文化学	国立民族学博物館	1(0)	1(0)	10(1)	12(1)
		比較文化学	国立民族学博物館	4(3)	2(0)	12(2)	18(5)
		国際日本研究	国際日本文化研究センター	4(2)	2(1)	7(1)	13(4)
		日本歴史研究	国立歴史民俗博物館	3(0)	1(0)	23(2)	27(2)
		日本文学研究	国文学研究資料館	2(0)	3(0)	7(2)	12(2)
		計			14(5)	9(1)	59(8)

(単位:人、カッコ内は留学生で内数)

◆ 特別共同利用研究員

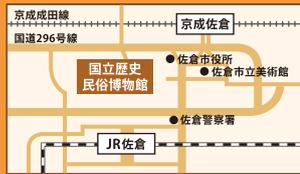
(平成22年5月1日現在)

国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国立国語研究所	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
3	6	0	5	4	2	20

(単位:人)

国立歴史民俗博物館

〒285-8502
千葉県佐倉市城内町117
TEL:043-486-0123(代表)
<http://www.rekihaku.ac.jp/>
【最寄り駅】
京成成田線京成佐倉駅(徒歩約15分)、JR佐倉駅→
ちばグリーンバス15分(「国立歴史民俗博物館」下車)



国文学研究資料館

〒190-0014
東京都立川市緑町10-3
TEL:050-5533-2900(代表)
<http://www.nijl.ac.jp/>
【最寄り駅】
多摩都市モノレール高松駅(徒歩約7分)
JR立川駅(徒歩約25分)



国立国語研究所

〒190-8561
東京都立川市緑町10-2
TEL:042-540-4300
<http://www.nijl.ac.jp/>
【最寄り駅】
多摩モノレール「高松駅」下車(徒歩約7分)「立川駅」より(徒歩約20分)
JR「立川駅」北口バスのりば2番より立川バスで
「自治大学校・国立国語研究所」下車徒歩(約2分)



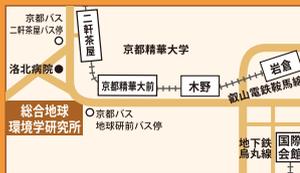
国際日本文化研究センター

〒610-1192
京都府京都市西京区御陵大枝山町3-2
TEL:075-335-2222(代表)
<http://www.nichibun.ac.jp/>
【最寄り駅】
阪急京都線阪急桂駅→京都市バス30分(「桂坂小学校前」下車)
JR山陰本線桂川駅→ヤサカバス25分(「花の舞公園前」下車)



総合地球環境学研究所

〒603-8047
京都府京都市北区上賀茂本山457-4
TEL:075-707-2100(代表)
<http://www.chikyu.ac.jp/>
【最寄り駅】
地下鉄烏丸線国際会館駅→京都市バス6分(「地球研前」下車)
叡山電鉄鞍馬線二軒茶屋駅(徒歩約10分)



国立民族学博物館

〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1
TEL:06-6876-2151(代表)
<http://www.minpaku.ac.jp/>
【最寄り駅】
大阪モノレール万博記念公園駅(徒歩約15分)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構本部

〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13
神谷町セントラルプレイス2階
TEL:03-6402-9200(代表)
<http://www.nihu.jp/>
【最寄り駅】
地下鉄日比谷線神谷町駅(出口4b徒歩約2分)
地下鉄三田線御成門駅(出口A5徒歩約10分)



2010年7月発行

